三重県埋蔵文化財調査報告１７７

上ノ庄北出遺跡発掘調査報告

～三重県一志郡三雲町上ノ庄～

１９９８．１０

三重県埋蔵文化財センター

序

伊勢平野のなかほどに位置する一志郡三雲町とその周辺は、雲出川をはじめ西方の堀坂山系から東流する小河川が形成した肥沃な沖積平野が広がっており、古来から多くの遺跡が営まれてきました。特に、上ノ庄北出遺跡近隣の中ノ庄遺跡は三重県の弥生時代の到来を告げる遺跡として著名であります。

今回報告する上ノ庄北出遺跡は、県道松阪久居線の緊急整備事業に先立って調査されたものです。同緊急整備事業に伴って近接する宮ノ腰遺跡、嬉野町田村に位置する田村西瀬古遺跡を含めて堀坂山系東側の沖積平野に調査の手が新たに入りました。その成果は当遺跡の報告と相まって皆様に貴重な資料を提供することと思います。

残念ながら上ノ庄北出遺跡は、現状保存が困難なため記録保存というかたちをとりました。当報告によって上ノ庄北出遺跡の概要が少しでもお分かり頂ければと折に望むものであります。

最後になりましたが、発掘調査にあたり献身的にご協力いただきました地元の皆様、温かい御配慮をいただきました三雲町建設課、三雲町教育委員会、三重県県土整備部道路整備課（旧　三重県土木部道路建設課）及び三重県津地方県民局久居建設部（旧　三重県久居土木事務所）の方々に心からお礼申しあげます。

平成１０年１０月

三重県埋蔵文化財センター
所　長　　大　井　與　生

例　　言

1　本書は、三重県一志郡三雲町上ノ庄字北出地内に所在する上ノ庄北出遺跡の発掘調査報告書である。

2　この発掘調査は、主要地方道松阪久居線緊急地方道路整備事業に伴い実施したものである。

3　調査は平成９年度に行った。調査体制は以下の通りである。

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県埋蔵文化財センター

主幹兼調査第一課長　吉水康夫

調査第一課主査兼第二係長　前川嘉宏

主事　山本義浩

技師　新名強

研修員　杉本寿範

4　当報告書の作成業務は三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び管理指導課がおこなった。遺構・遺物の写真、執筆及び全体の編集は、山本義浩と杉本寿範が行った。遺物観察表の作成は上記２名の他、北条正則があたった。

5　調査にあたって三雲町在住の各位、三雲町建設課、三雲町教育委員会、三重県県土整備部道路整備課（旧　土木部道路建設課）及び三重県津地方県民局久居建設部（旧　三重県久居土木事務所）から多大な協力を受けたことを明記する。

6　挿図の方位は全て真北で示している。なお、磁針方位は西偏６°20′（昭和62年）である。

7　挿図と写真図版の遺物番号は実測図の番号と対応している。写真図版は特に断らない限り縮尺不同である。

8　当報告書での用語は以下の通り統一した。

つき・・・・「坏」「杯」があるが「杯」を用いた。

わん・・・・「椀」「碗」があるが「椀」を用いた。

9　当報告書での遺構は通番となっている。また、遺構表示略記号は下記の通りである。

ＳＢ：掘立柱建物　ＳＥ：井戸　ＳＸ：墓　ＳＫ：土坑　ＳＤ：溝　pit：ピット、柱穴

10　本書で報告した記録及び出土遺物は三重県埋蔵文化財センターで保管している。

11　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前　言 ……山本　義浩…（1）
1　調査の契機 ……（1）
2　調査の経過 ……（1）
3　調査の方法 ……（1）
4　遺跡の名称について……（2）
Ⅱ　位　置　と　環　境 ……杉本　寿範…（3）
Ⅲ　層　位　と　遺　構 ……山本　義浩…（5）
1　調査区の地形と基本層位 ……（5）
(1) 層位 ……（5）
2　検出した遺構 ……（5）
(1)古墳時代の遺構 ……（5）
(2)中世の遺構 ……（5）
Ⅳ　遺　物 ……山本　義浩…（12）
1　古墳時代の遺物 ……（12）
2　中世の遺物 ……（12）
3　包含層出土の遺物 ……（13）
(1) 弥生時代後期から古墳時代前期の遺物 ……（13）
(2) 古墳時代後期から中世の遺物 ……（13）
4　木製品 ……（13）
5　金属製品・その他 ……（13）
Ⅴ　結　語 ……山本　義浩…（26）

挿　図　目　次

第１図　上ノ庄北出遺跡周辺遺跡位置図 …… (2)
第２図　遺跡位置図 …… (4)
第３図　調査区位置図 …… (4)
第４図　調査区西壁土層断面図 …… (7)
第５図　遺構平面図 …… (8)
第６図　ＳＫ７遺物出土状況図 …… (9)
第７図　SK14遺物出土状況図 …… (9)
第８図　SB19実測図 …… (10)
第９図　SE17遺物出土状況図 …… (11)
第10図　SX16遺物出土状況図 …… (11)
第11図　ＳＫ３遺物出土状況図 …… (11)
第12図　ＳＫ４遺物出土状況図 …… (11)
第13図　ＳＫ５遺物出土状況図 …… (11)
第14図　ＳＫ６遺物出土状況図 …… (11)
第15図　ＳＫ７出土遺物実測図 …… (14)
第16図　SK14、SD10出土遺物実測図 …… (15)
第17図　SK3、SK4、SK5、SD8、SD11、SD12、SD13出土遺物実測図 …… (16)
第18図　SD12、SX16、SE17出土遺物実測図 …… (17)
第19図　SX16、SE17出土木製品・金属製品実測図 …… (18)
第20図　包含層・その他の出土遺物実測図(1) …… (19)
第21図　包含層・その他の出土遺物実測図(2) …… (20)
第22図　包含層・その他の出土遺物実測図(3) …… (21)

図　版　目　次

図版１ …… 調査前風景
…… Ａ地区全景
図版２ …… Ｂ地区全景
…… SX16
図版３ …… ＳＫ７
…… SK14
図版４ …… SD10とSD11
…… ＳＫ４
図版５ …… 出土遺物
図版６ …… 出土遺物
図版７ …… 出土遺物
図版８ …… 出土遺物
図版９ …… 出土木製品
図版10 …… 出土木製品・出土金属製品

表　目　次

第１表　遺構観察表 …… (6)
第２表　出土遺物観察表 …… (21～25)

Ⅰ 前　言

1　調査の契機

県道松阪久居線は三重県の南北交通の大動脈である国道23号線の西側を通り松阪市中心部と久居市中心部を最短距離で結ぶ。沿道の松阪市北部から一志郡三雲町、同郡嬉野町及び久居市の住民にとっては掛け替えのない生活道路である。

しかし三雲町上ノ庄地内から嬉野町算所地内にかけての本線は旧村落内を通過しているため部分的に道路幅が狭く自動車の対向に著しく支障をきたしていた。そのため旧村落内を迂回させて路線の付け替えを行うことになった。

当埋蔵文化財センターでは三重県関係部局から事業照会を受け、付け替え路線全線に渡って遺物散布状況を調査し、その上で数地区に渡って試掘調査を実施した。その結果、現状保存が困難なため記録保存というかたちで本遺跡、宮ノ腰遺跡（三雲町上ノ庄字宮ノ腰、平成８、９年度に渡って調査）、田村西瀬古遺跡（嬉野町田村字西瀬古、平成９年度調査）の３遺跡の緊急発掘調査を実施した。

2　調査の結果

a　調査経過の概要

調査は９月中旬から重機による表土掘削を行い、9月24日から作業員を入れて調査を開始した。調査区は地下水位が高く、終日、水中ポンプによって排水を行った。また、10月中は近年にない好天に恵まれ、遺構検出をはじめ調査は順調に進み12月中旬に終了することができた。最終的な調査面積は2,100㎡であった。

調査は、作業員諸氏の努力により恙なく終了することができた。心からお礼申し上げます。

b　調査日誌（抄）

９月10日　表土除去、調査区範囲設定（Ａ地区）
９月11日　道具搬入
９月12日・19日　Ａ地区　重機掘削
９月24日　Ａ地区　人力調査開始
　　包含層掘削
10月13日～15日　Ａ地区調査範囲拡張(南部西端)
10月20日　ＳＫ７検出
10月21日　ＳＤ８掘削
10月22日　SD10・11掘削
10月28日　SK14実測、SD11・12・13完掘
10月30日　Ａ地区全景写真撮影
10月31日　Ａ地区1／20遺構平面図実測準備
11月５日～6日　Ａ地区1／20遺構平面図実測
11月10日～14日　Ｂ地区　重機掘削
11月19日　Ｂ地区　入力調査開始
11月25日　SX16、SE17、SD18検出・掘削
11月28日　SX16から小刀出土
　　B地区全景写真撮影、遺構平面図実測
　　(1／100平板測量)
12月２日　SX16、SE17実測
12月４日　道具あとかたづけ
12月５日　道具返納
12月10日　ベルトコンベア、発電機返納
　　上ノ庄区長へ調査終了のご挨拶
平成10年1月31日合同遺跡発掘調査報告会（三雲町中央公民館）

c　文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官等あてに行っている。

・法第５７条の３第１項（文化庁長官宛）
平成９年９月５日付　道建第939号（県知事通知）
・法第98条の２第１項（文化庁長官宛）
平成9年9月18日付教文第469号（県教育長通知）
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（久居警察署長宛）
平成10年1月22日付教埋第11-47号（県教育長通知）

3　調査の方法

a　地区設定について

今回の調査では平成7年11月13日～16日に実施した試掘調査結果を踏まえてＡ、Ｂの２地区を設定した。各地区内を４ｍ四方の升目で切ることによって小地区を設定した。西から数字、北からアルファベットを付け、升目の北西隅の交点をその小地区の符号とした。なお、この小地区設定は国土座標軸とは

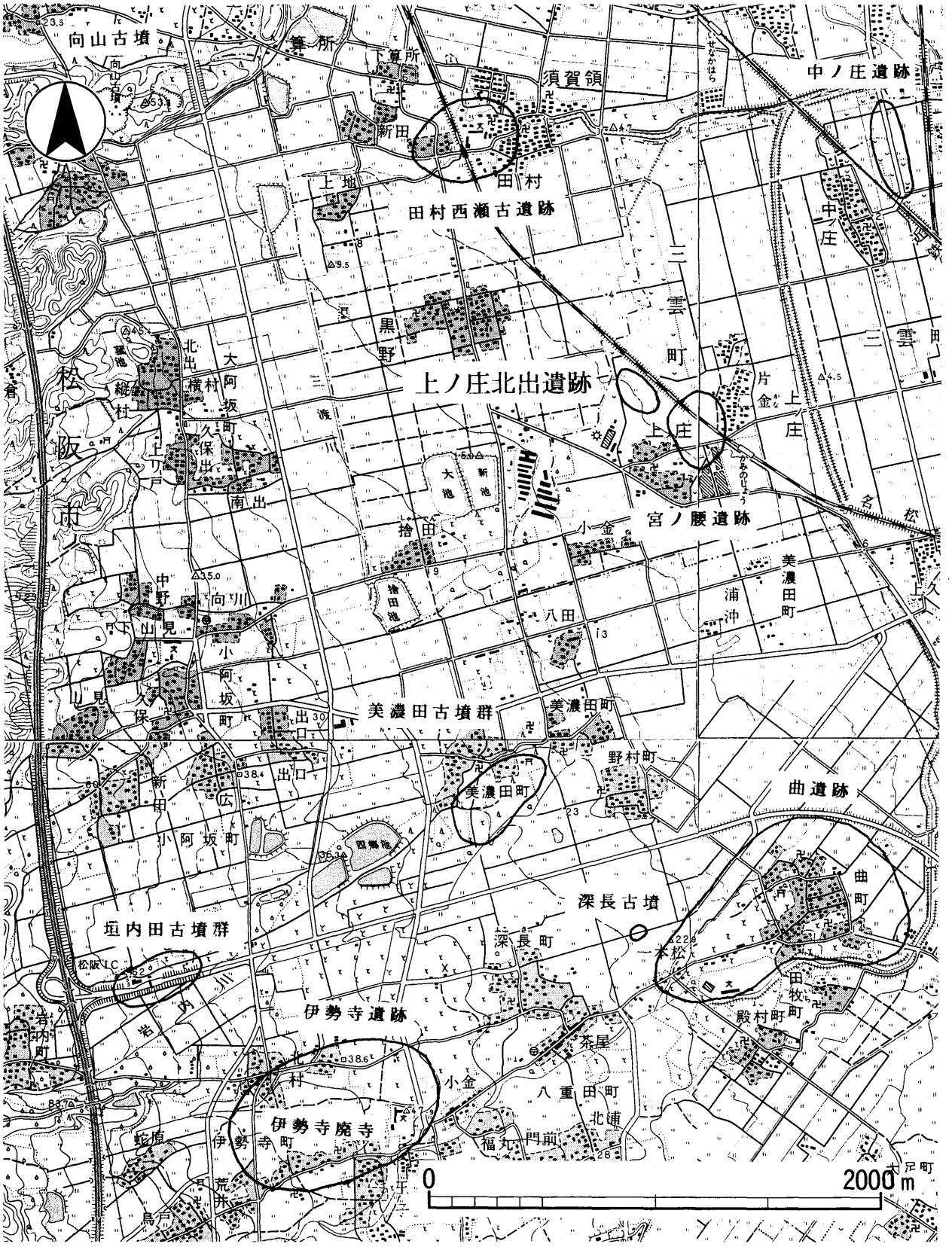
無関係である。

b　遺構図面について

A地区の遺構平面図は1／20で作成した。B地区の遺構平面図は1／100で作成した。また、井戸・墓・土坑については個別に1／10の実測図を作成している。

4　遺跡の名称について

字名を取って上ノ庄北出遺跡とした。



第1図　上ノ庄北出遺跡周辺遺跡位置図 1:25,000（国土地理院 1:25,000「大仰」「松阪港」「大河内」「松阪」より作成）

Ⅱ　位置と環境

三重県のほぼ中央にある三雲町は、一志郡の東部に位置し、北は雲出川を境として津市と香良洲町に、南は三渡川を経て松阪市に、西は嬉野町に接している。上ノ庄地区は、当町の南西部にあり、三渡川の支流、岩内川下流の左岸に位置する沖積平野である。上ノ庄北出遺跡は、同町上ノ庄字北出に所在する。当遺跡周辺は、現在水田となっている。以下この地域の歴史を概観する[1]。

旧石器時代から縄文時代では、当遺跡の北西約3kmにある嬉野町田村西瀬古遺跡から有舌尖頭器が出土している。

弥生時代には、当遺跡の南西約1kmのところにある三雲町宮ノ腰遺跡（平成8年度第一次調査）から前期の壺や甕が出土している[2]。当遺跡の北東3kmのところにある同町中ノ庄遺跡では、前期中葉の遺構、遺物が確認されている[3]。田村西瀬古遺跡からは、弥生時代後期から末頃の方形周溝墓が確認されている。

古墳時代になると当地域周辺では、前期古墳の造営が顕著となる。嬉野町上野及び、松阪市小野町にかけて全長71.4mの前方後方墳である向山古墳がある[4]。松阪市深長町には、径約45mの円墳である深長古墳がある[5]。中期には、宮ノ腰遺跡で竪穴住居が確認されている。後期には、中ノ庄遺跡で馬形埴輪や円筒埴輪が出土しており、田村西瀬古遺跡でも円筒埴輪が出土している。岩内川の上流には、松阪市美濃田町の美濃田古墳群[6]、同市岩内町の垣内田古墳群[7]に代表される群集墳が形成される。

奈良、平安時代には、松阪市の伊勢寺廃寺[8]や同市伊勢寺遺跡[9]等の寺院や集落がつくられる。田村西瀬古遺跡では、奈良時代の掘立柱建物、井戸等が確認されている。宮ノ腰遺跡では、平安時代末の溝が確認されている。

鎌倉時代には、宮ノ腰遺跡から掘立柱建物、井戸等が確認されている。田村西瀬古遺跡からは溝や井戸、中世墓が確認されている。伊勢寺廃寺では、大溝が確認されている。

文献によると、平安時代末から南北朝時代にかけて、当地域には、醍醐寺領曾祢庄が形成される。貞和3年(1347)9月4日の曾祢庄三ケ郷沙汰人百姓等請文『醍醐寺文書』に「下郷寂蓮、上郷円勝、久米郷右馬允」と連署があり、「上郷」が現在の上ノ庄あたりに相当すると考えられている。

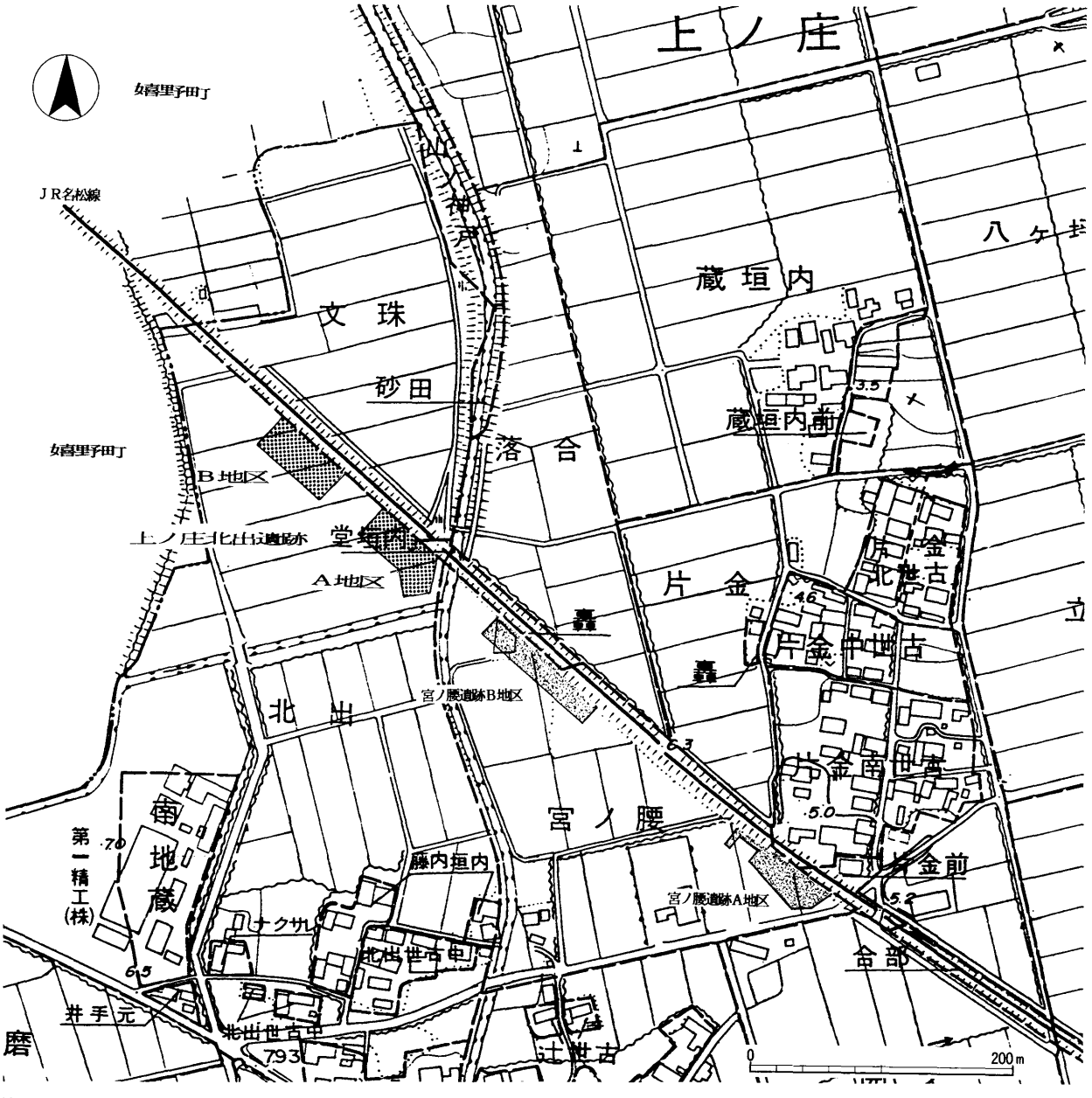
戦国時代には、南伊勢を支配していた北畠氏の影響が大きく、その被官、佐藤氏が三雲町肥留に居を構えていた。織田信長の伊勢侵攻が本格化すると、北畠氏の領内で、軍事的緊張が高まった。その頃の史料のいくつかが『佐藤文書』に残されている。一つは織田軍に備えるため佐藤氏が天花寺城（現在の嬉野町天花寺）に入城するものであり、もう一つは、当町内にあった蘇原城に関する史料である。

当遺跡周辺は、文献で見ると中世においても栄えた地域であったと考えられるが[10]、考古学的には不明な点が多い。当地域の解明は、これからである。

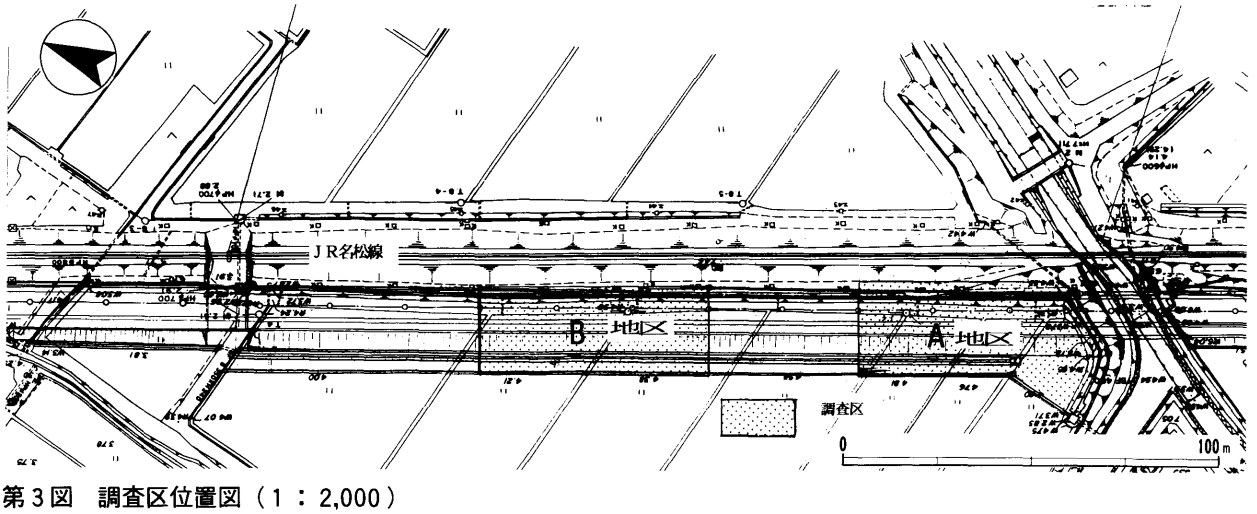
以上、上ノ庄北出遺跡周辺の歴史的環境を概観した。

[註]

① 平成9年度 三重県埋蔵文化財センター調査
② 伊藤裕偉『宮ノ腰遺跡発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター 1997
③ 谷本鋭次『中ノ庄遺跡発掘調査報告』 三重県教育委員会 1972
④ 『松阪市史 第二巻 史料篇 考古』 1978
⑤ 増田安生「深長古墳」『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 第1分冊 三重県教育委員会 1987
⑥ 『松阪市史 第二巻 史料篇 考古』 1978
⑦ 前川嘉宏「垣内田古墳群」『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査報』第2分冊の 2 1990
⑧ 倉田直純「伊勢寺廃寺」『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』 三重県埋蔵文化財センター 1990
⑨ 竹内英昭「伊勢寺遺跡」『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第2分冊 三重県埋蔵文化財センター 1991
⑩ 『ふるさと三雲今と昔』 三雲町 1996



第2図　遺跡位置図（1：5,000）



第3図　調査区位置図（1：2,000）

Ⅲ　層位と遺構

1　調査区の地形と基本層位

調査区は調査前の標高で約5mの低地に位置する。既にほ場整備事業が完了している地域である。

今回の調査で確認された遺構は、古墳時代と中世の2時期に大きく区分される。層位的には、この2時期の検出面は同一である。

(1)　層位

遺跡の層序はA地区とB地区で明確に分かれるので地区別に列挙する。

A地区では、上から耕作土(灰黄褐土･10YR4/2)、包含層(黒色粘質土･N2/)、検出面(灰オリーブ色砂質土･5Y6/2)となる。特に、包含層は弥生時代末期から古墳時代初めの弥生土器や古式土師器を有していた。

B地区では、上から耕作土、包含層Ⅰ(暗褐色粘質土･10YR2/2)、包含層Ⅱ(暗褐色粘質土･10YR2/3)、検出面(褐色粘質土・10YR5/6)となる。

2　検出した遺構

今回の調査で確認できた遺構は前述のように大きく古墳時代と中世に分かれる。ここでは主な遺構について記述する。

(1)　古墳時代の遺構

古墳時代の遺構は土坑と溝がある。

ＳＫ７　A地区中央部で検出した土坑である。平面方形で長辺約1.8m、短辺約1.6m、深さ約0.2mである。埋土は黒色砂質土で、古墳時代後期の土師器や須恵器が出土している。

ＳＫ14　A地区中部東端で検出した土坑である。平面長円形であったと推定されるがSD11によって後世削平されたようで南側1/2 程度を検出した。推定長辺約1.7m、深さ約0.4mである。古墳時代後期の土師器類が出土している。

ＳＤ10　A地区中央部で検出した溝である。埋土は暗灰砂質土であった。幅約1.5m、深さ約0.2mで北流している。流路確認部北端でSD11(中世)によって切られている。埋土中には古墳時代後期の土師器の台付甕が多数出土した。

(2)　中世の遺構

中世の遺構は、概ね平安時代末から鎌倉時代前半のものである。A地区で数多く確認されているピットは遺構としては良好に確認できるもので掘立柱建物の柱穴であることは間違いないであろう。しかし、建物としてまとめることができたのは、SB19のみである。

ＳＢ19　A地区中央部で検出した掘建柱建物である。3間×3間の東西棟(N35°W)である。梁行北端は0.8mと狭い。廂である可能性もある。柱掘形は一辺0.3m～0.5mの方形または円形である。大きさ、形態とも様々である。ピット遺物は小片のため時期決定をすることはできなかった。SD12との位置関係と、一部根石を持つピットがあることから中世のものではないだろうか。

ＳＥ17　B地区北部で検出した井戸である。平面方形で一辺約1.5m、深さ約1.2mである。底部は青灰色粘土層で止まる。井戸側の構造物は縦板が約1.3m下部の井戸底部から直立している状態であった。井戸枠には臍が施されていた。

ＳＸ16　B地区北部で検出した墓である。平面方形で一辺約1.5m、深さ約1.2mである。底部は青灰色粘土層で止まる。底部中央に直径0.3m大の石があり、その周辺に小刀2本が地山に突き刺した状態で出土した。他に鎌の刀部1点、不明金属製品1点(刀剣の刀部未成品)が出土している。埋土は暗灰色粘質土である。小刀の刀部には樋があることから南北朝時代以降の作である[①]。棺に使用されたと思われる木材片は見つけることができなかった。

ＳＫ３　A地区南部東端畦付近で検出した土坑である。規模・深さ・形状は不明。後世に構築された畦によって上部が削平されている。土師器の甕が胴部で二つに割られ、しかも上半分が反対向きに伏せた状態で出土した。畦を構築する時にこの甕を発見し、そのまま埋め戻したものであろう。内蔵物は無かった。

ＳＫ４　A地区南部で検出した土坑である。楕円形で長径約2.1m、短径約1.4m、深さ約1.1mである。土師器の甕が完形で出土した。内蔵物は無かった。

ＳＫ５　Ａ地区南部中央で検出した土坑である。形状は不定形で長径約1.4m、短径約1.1m、深さ約0.2mである。土師器の甕、ロクロ土師器杯及び山皿が出土している。甕には内蔵物は無かった。

ＳＫ６　調査区南部東端で検出した土坑である。方形で一辺約1.0mである。上部が削平され深さは不明である。劣化が進んでいるが、残存度1/2 程度の土師器の甕が出土した。内蔵物はなかった。

ＳＤ８　Ａ地区中央部で検出した溝である。埋土は灰黄褐土及び黒色粘質土であった。幅約1.0m、深さ約0.35mで南西から北東へ流れている。北東端は後世の削平を受け流路を検出できなかった。埋土中からは12世紀末から13世紀初めの山茶椀片が出土した。

ＳＤ11　Ａ地区中央部で検出した溝である。埋土は暗灰粘質土であった。幅約1.8m、深さ約0.2mで西から東へ流れている。西端と東端は後世の削平のため流路を検出できなかった。古墳時代後期の溝であるSD10を切っている。SD12と位置的に平行して東流している。埋土中からは土師器小皿、ロクロ土師器杯、山茶椀などが出土した。

ＳＤ12　Ａ地区北部で検出した遺構である。埋土は暗灰粘質土であった。幅約2.0m、深さ約0.4mで西から東へ流れている。SD11と同じく西端と東端は後世の削平のため流路を検出できなかった。SD11と位置的に平行して東流している。埋土中から土師器の甕、山茶椀、山皿が出土している。12世紀末期から13世紀初めにかけてのものである。

註

① 小林秀氏の御教示による。

第１表　遺構一覧表

掘立柱建物

遺構名	規模 桁行×梁行	桁行(m) 柱間	梁行(m) 柱間	棟方向	時期	備考
ＳＢ19	３間×３間	4.2m 1.35＋1.35＋1.5	4.4 0.8 ＋1.8 ＋1.8	N35°W 東西棟	不明（鎌倉？）	ピット遺物小片のため時期確定できず。

井戸

遺構名	規模 (m)	深さ (m)	井戸枠	形状	出土遺物
ＳＥ17	２．２	1.18	臍組み木製木枠	隅丸方形	土師器小皿・ロクロ土師器小皿・山茶椀

墓

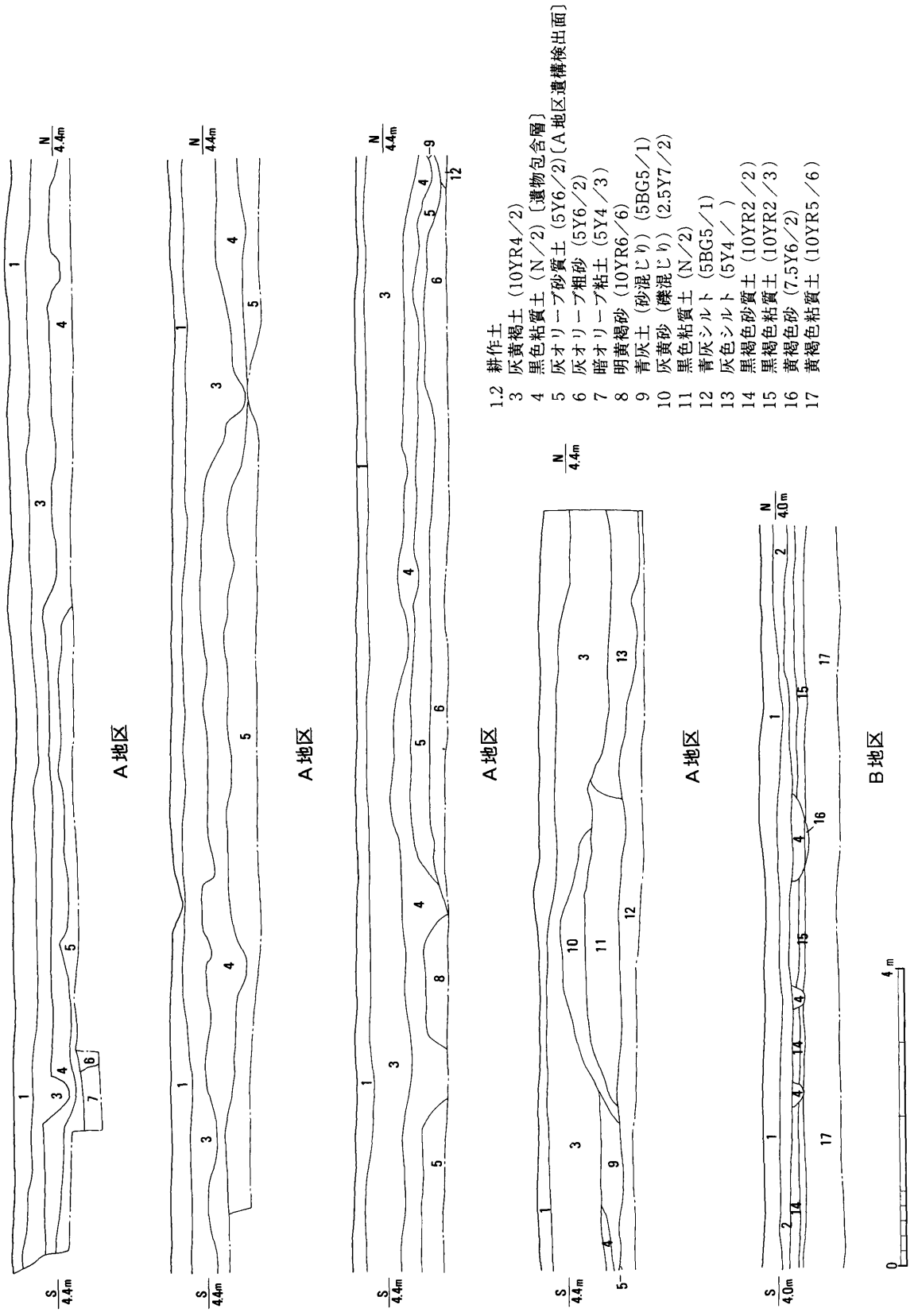
遺構名	規模 (m)	深さ (m)	棺の有無	形状	出土遺物
ＳＸ16	１．５	1.1	不明。棺の材料となる木片や釘類は無い。	方形	山皿・白磁椀片・小刀・黒漆塗鞘・鎌・鉄未製品

土坑

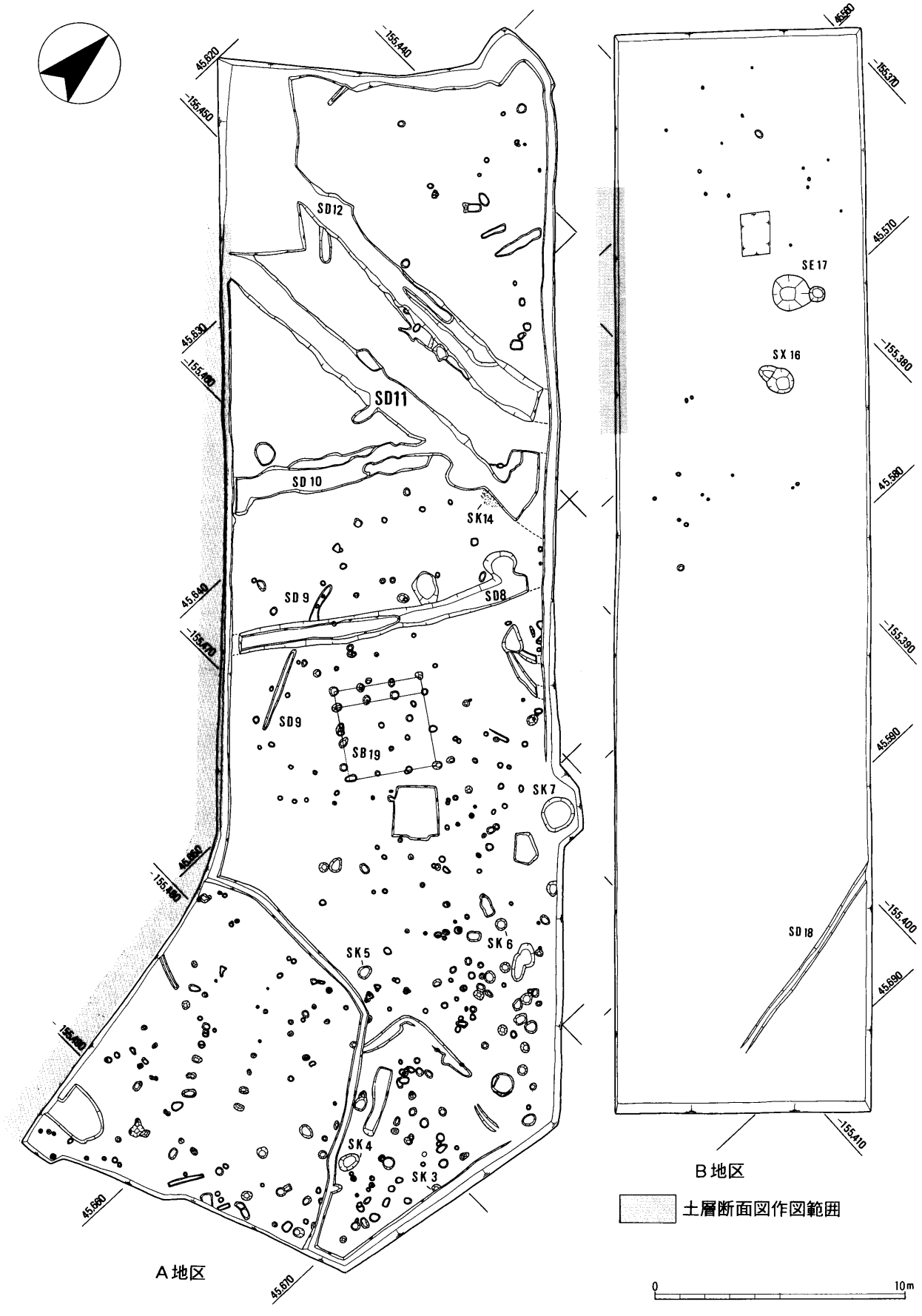
遺構名	規模(m)	深さ(m)	形状	時期	出土遺物	備考
ＳＫ３	不明	不明	不明	鎌倉	土師器甕・ロクロ土師器杯	上部削平
ＳＫ４	2.1 ×1.4	1.1	楕円形	鎌倉	土師器甕	
ＳＫ５	1.4 ×1.1	0.2	不定形	鎌倉	土師器甕・ロクロ土師器杯・山皿	
ＳＫ６	１．０	不明	方形	鎌倉	土師器甕	上部削平
ＳＫ７	１．８	0.4	隅丸方形	古墳後期	須恵器高杯・土師器高杯・長頸壺・Ｓ字甕・甑	
ＳＫ14	2.0 ×0.8	0.9	半円形	古墳後期	小型丸底壺・長頸壺土師器高杯・Ｓ字甕	

溝

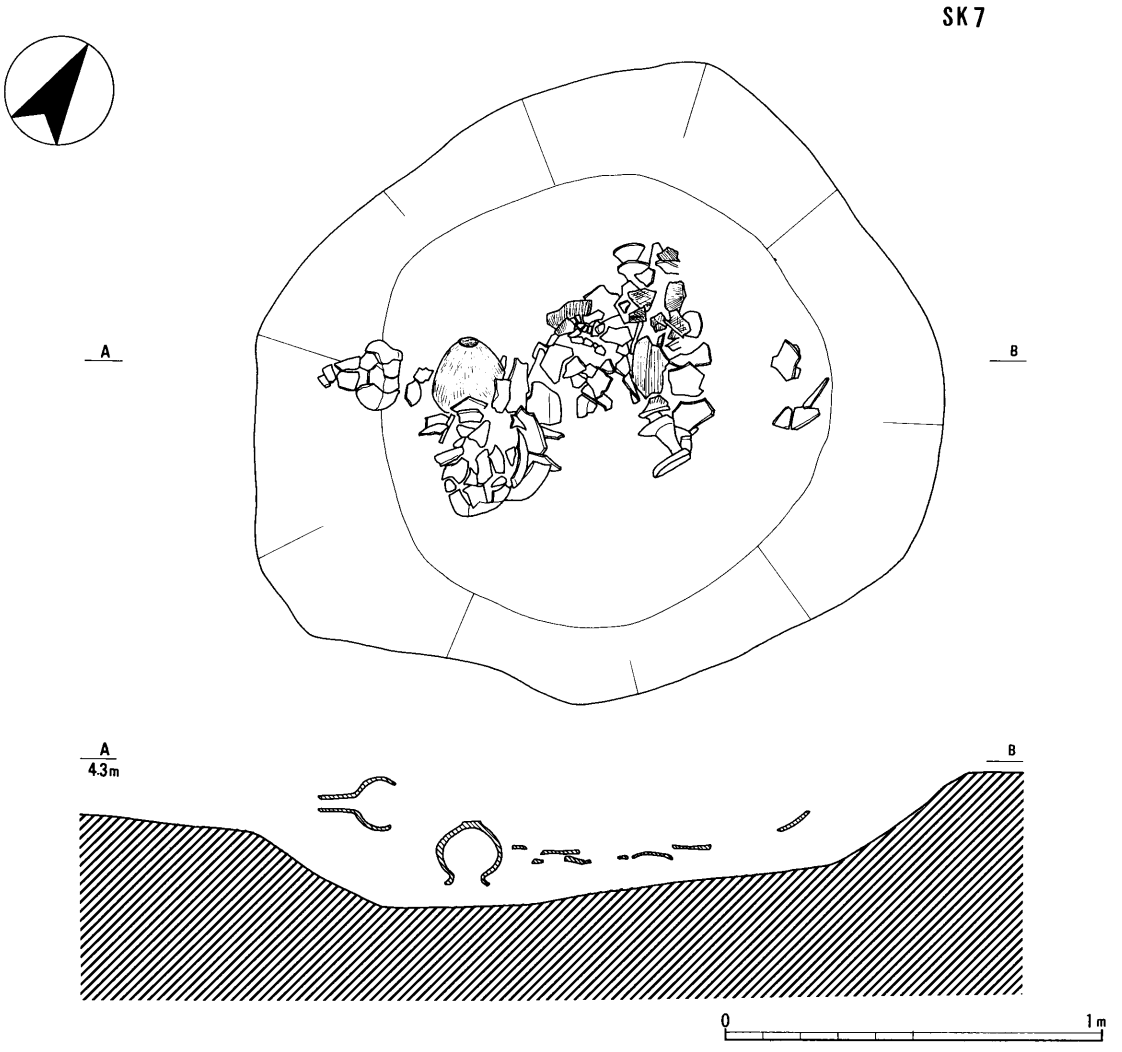
遺構名	幅 (m)	深さ (m)	時期	流れ方向	出土遺物	備考
ＳＤ８	1.0	0.35	鎌倉	南西→北東	山茶椀	SD9より新
ＳＤ10	1.5	0.34	古墳後期	南西→北東	手捏土器・Ｓ字甕・広口壺	SD11より旧
ＳＤ11	1.8	0.20	鎌倉	西→東	土師器小皿・ロクロ土師器杯・山茶椀・陶器鉢・土師器鍋・土錘・平瓦	SD10より新、SD12と位置的に平行
ＳＤ12	2.0	0.39	鎌倉	西→東	土師器甕・山茶椀・山皿	SD11と位置的に平行



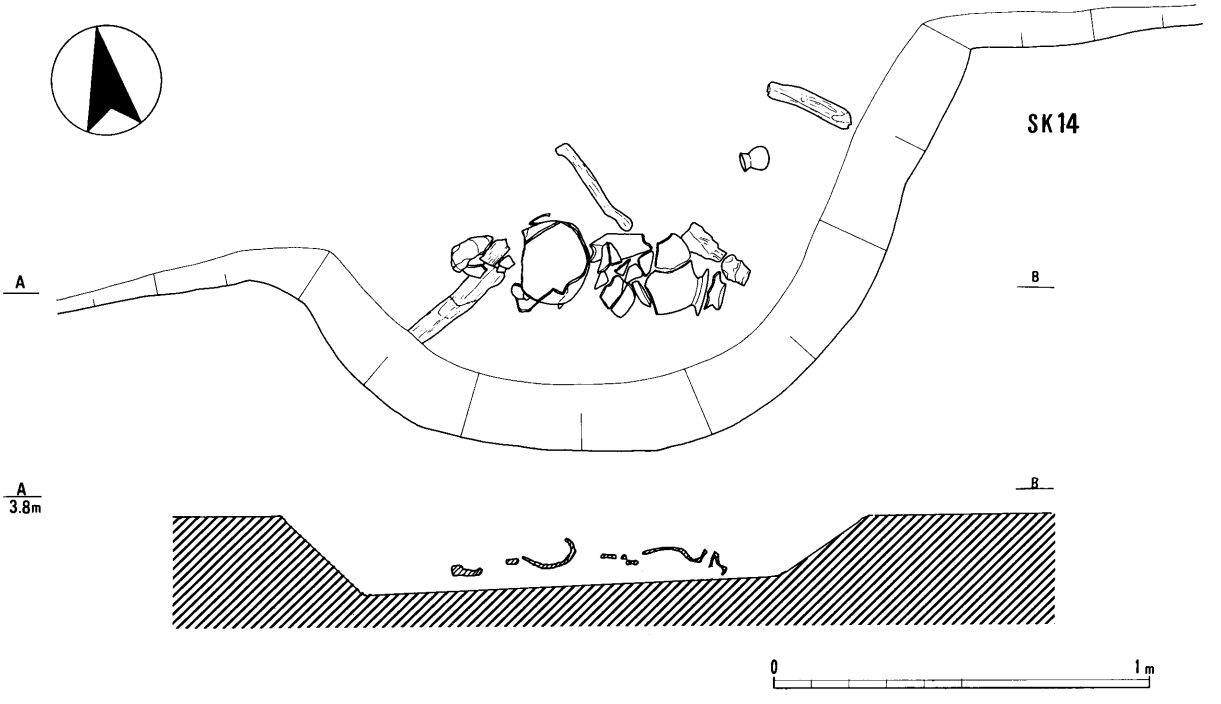
第4図　調査区西壁土層断面図（1：80）（作図範囲は第5図参照のこと）



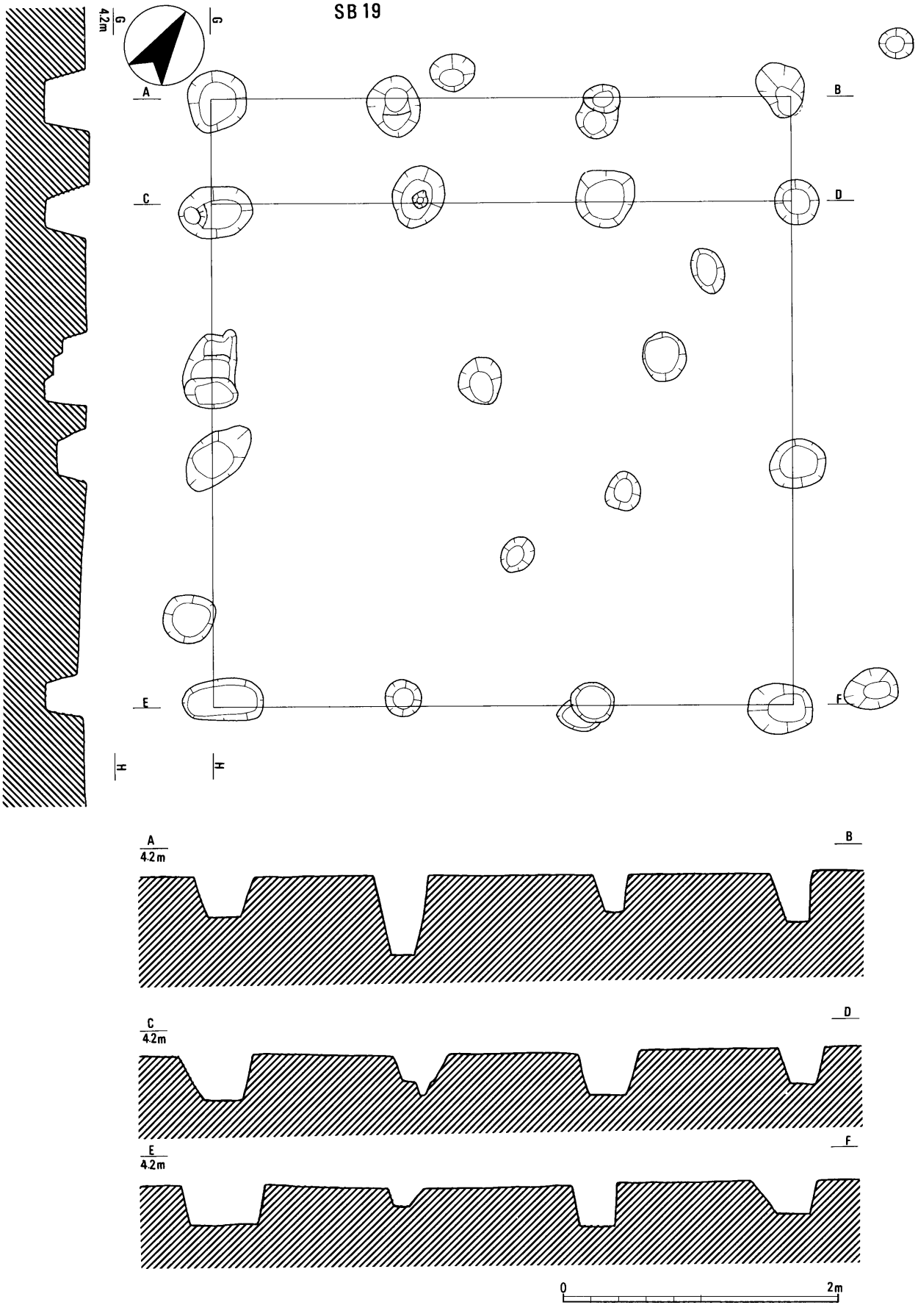
第5図　遺構平面図（1：300）



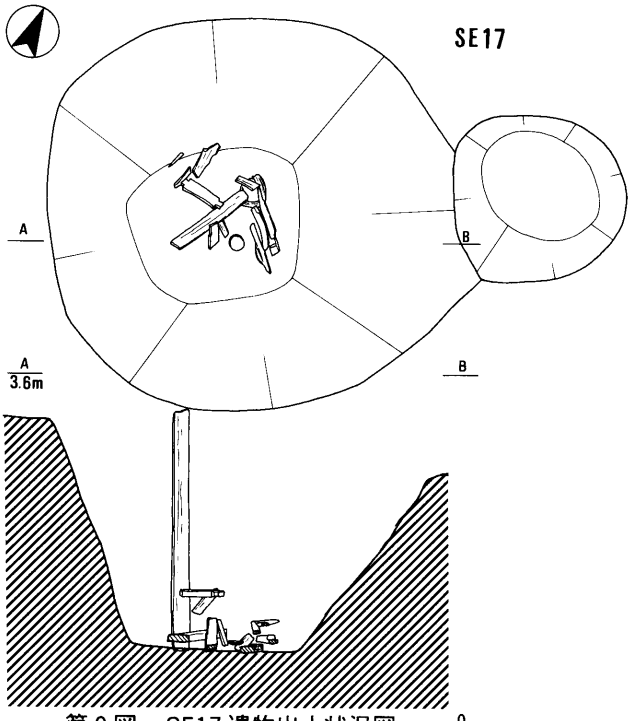
第６図　ＳＫ７遺物出土状況図（１：20）



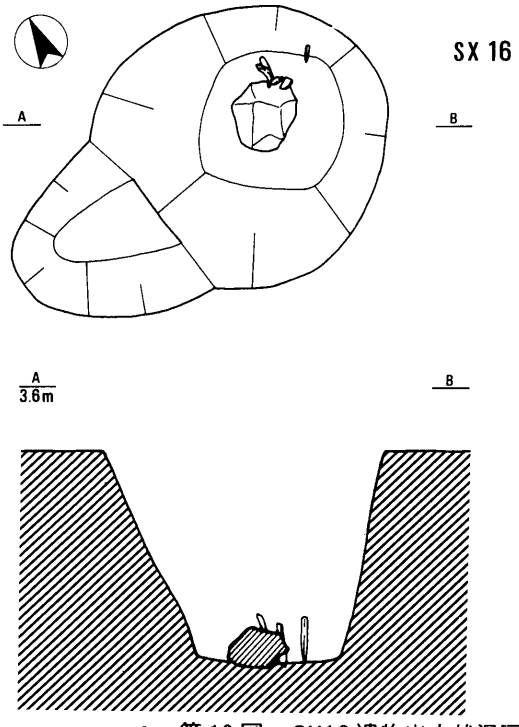
第６図　ＳＫ14遺物出土状況図（１：20）



第8図　ＳＢ19実測図（1：40）

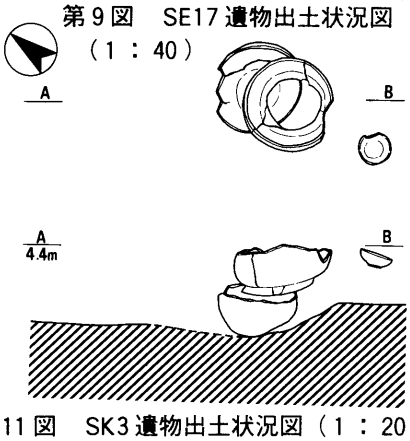


第９図　SE17遺物出土状況図
（１：40）

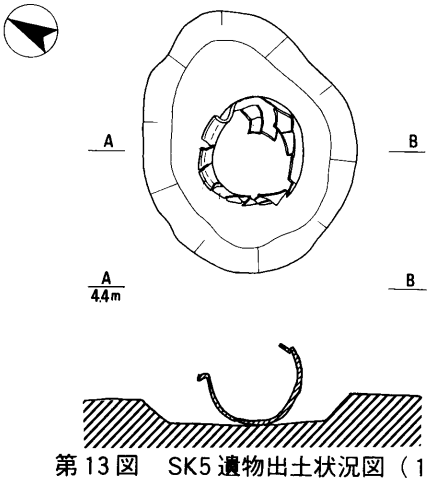


第10図　SX16遺物出土状況図
（１：40）

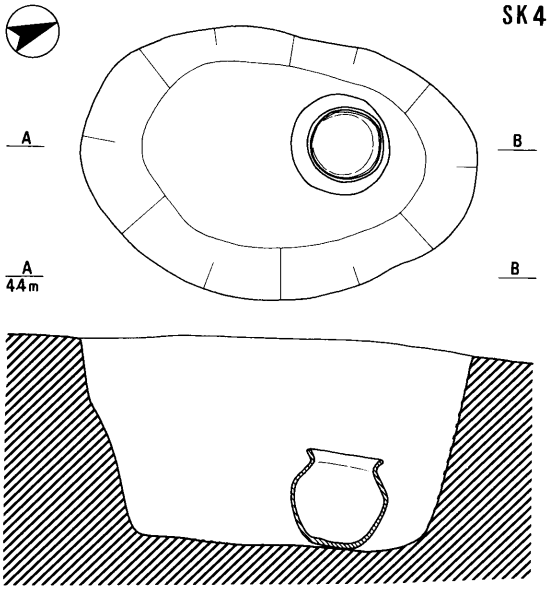
0　2m



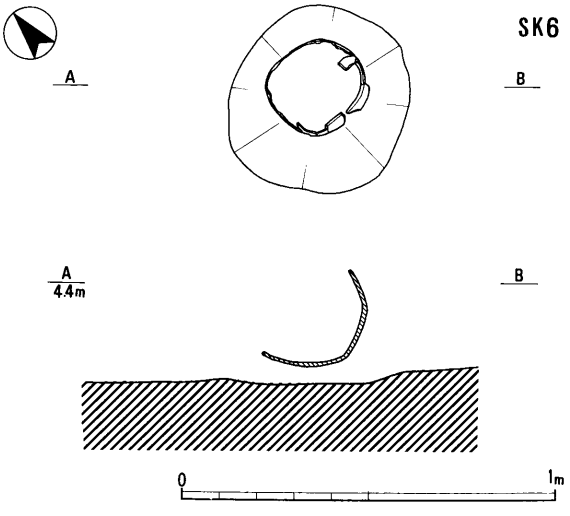
第11図　SK3遺物出土状況図（１：20）



第13図　SK5遺物出土状況図（１：20）



第12図　ＳＫ４遺物出土状況（１：20）



第14図　ＳＫ６遺物出土状況（１：20）

Ⅳ 遺　物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱に換算して約40箱である。その大部分が古墳時代の土師器類と中世の土師器及び陶器類である。特に、包含層から弥生時代末期から古墳時代前期にかけての土師器類が多数出土しているのは本遺跡の特徴のひとつである。

ここでは、調査によって出土した遺物を中心に概略を記す。個々の遺物の詳細については、出土遺物観察表も参照されたい[①]。

1　古墳時代の遺物

中期から後期までのものがある。

ＳＫ７出土土器（1～13）

須恵器有蓋高杯(1)[②]、長頸壺(2)、高杯(3～4)、壺(5)、甕(6～11)、甑(12～13) がある。須恵器有蓋高杯(1) には脚部内面にヘラ記号がある。高杯(4) は、杯部は現存していないが、脚部は、やや膨らみ気味の柱状部と直線的に広がる裾部からなる。透孔は無い。台付甕(10)は、口縁部が立つ結果、口縁端部は水平化している。脚台端部に少し面をもつ。体部やや下方が穿孔されている。

ＳK14出土土器（14～21）

小型丸底壺(14)、長頸壺(15)、高杯(16～17)、台付甕(18～21) がある。小型丸底壺(14)は、口縁部は体部とほぼ同径で、頸部は括れ、体部外面はヘラケズリが施されている。高杯(16)は、須恵器を模した器形をしている。高杯(17)は、口縁端部は薄く、丸みを持つ。口縁部は外反気味で、口縁部と杯底部の境界が強調されている。脚はやや膨らみ気味の柱状部と直線的に広がる裾部から成る。透孔はない。

ＳD10出土土器（22～37）

手捏土器(22)、壺(23)、広口壺(24 ～25)、台付甕(27～37) がある。手捏土器(22)は、外面ナデ、内面オサエで調整されているが粗製である。受口状台付甕(27)は、口縁部が直立し、丸みのある内斜面を持つ。口縁部外面に刺突文がつく。

2　中世の遺物

ＳＫ３出土土器（38 ～39）

ロクロ土師器杯(38)と土師器甕(39)がある。ロクロ土師器杯(38)は、口縁部は若干内彎しながら伸び、端部近くで緩く外彎する。土師器甕(39)は、南伊勢系鍋が成立する以前の12世紀代のものである[③]。伊藤編年による仮Ａ段階にあたる。

ＳＫ４出土土器（40）

土師器甕(40)は、SK3出土の土師器甕(39)と同じく南伊勢系鍋成立前段階の仮Ａに相当する[④]。外面に煤、内面底部に何らかの種子の焦げ跡が見られる。

ＳＫ５出土土器（41～43）

土師器甕(41)は、先に述べた土師器甕(39)、(40)と同種のものである。ロクロ土師器杯(42)は、口縁部が直線的に伸びている。

ＳＫ６出土土器（175）

土師器甕(175) は、先に述べた土師器甕(39 ～41) と同種のものである。残存状況が極めて悪い。SK6は上部が削平されており出土状況から包含層遺物として取り上げた。

ＳＤ８出土土器（43～49）

山皿(43)と山茶椀(42、44～49) がある。(44)と(46)は内面に自然釉がかかっている。(49)は底部に墨書がみられる。藤澤編年第３段階５形式にあたり、いずれも12世紀末から13世紀初頭のものである[⑤]。

ＳD11出土土器（50 ～63）

土師器小皿(50～55)、土師器皿(54～55)、ロクロ土師器杯(56)、山茶椀(57～58)、陶器の片口鉢(59)、土師器鍋(60～61) がある。特に、(60)は外面に煤の付着がみられる。土錘(62)は完存。瓦(63)は平瓦で凸部に布目が観察できる。

ＳD12出土土器（64）

土師器鍋(64)は、先に述べた土師器甕(39～41)、(175) と同種のものである。山茶碗(66)は、藤澤編年第2段階4型式にあたり12世紀前期中葉のものである[⑥]。

ＳD13出土土器（65）

土師器皿(65)は器壁は薄く、外面未調整で内面ナデ。口縁部先端は尖る。歪みが大きい。

ＳE17出土土器（70～76、78～87）

山茶椀(76～78) は藤澤編年の第3段階5型式に

あたる。[7] 甕蓋(86)は土師器の甕の蓋である。口縁部に煤が付着している。

ＳＸ16出土土器（68～69）

山皿(68)は、底部に墨書があり藤澤編年第3段階5形式にあたるものである。[8]

3　包含層出土の遺物

本遺跡のＡ地区から、包含層（黒色粘質土Ｎ2/）から弥生時代後期から中世に至る土器類が出土している。特に、弥生時代後期から古墳時代前期に属するもの(102～140)と、それ以降に属するもの(141～177)に分類した。

(1)　弥生時代後期から古墳時代前期の遺物

小型壺(104～105)は精製品ではないが、(105) は体部外面が磨かれている。受口甕(109) は口縁端部外面に刺突がみられ、僅かに内傾化し頸部でくの字に折れ肩部はあまり張らない。甕(111) は受口状の形状を残すが口縁端部は緩く外弯する。甕(112) は口縁部外面に面をもち刺突が施されている。甕(118) は体部に突帯をもつ。近江系の受口甕に類例がみられる。[9] 高杯(134～135)は貫通しない円孔が1カ所穿たれている。[10] 台付甕(136) はいわゆるS字甕である。山田猛氏による分類のA2 類にあたる。[11] 台付甕(137)は同じくB類にあたる。[12] 口縁端部の面はなくなり、丸くなる。

(2)　古墳時代後期から中世の遺物

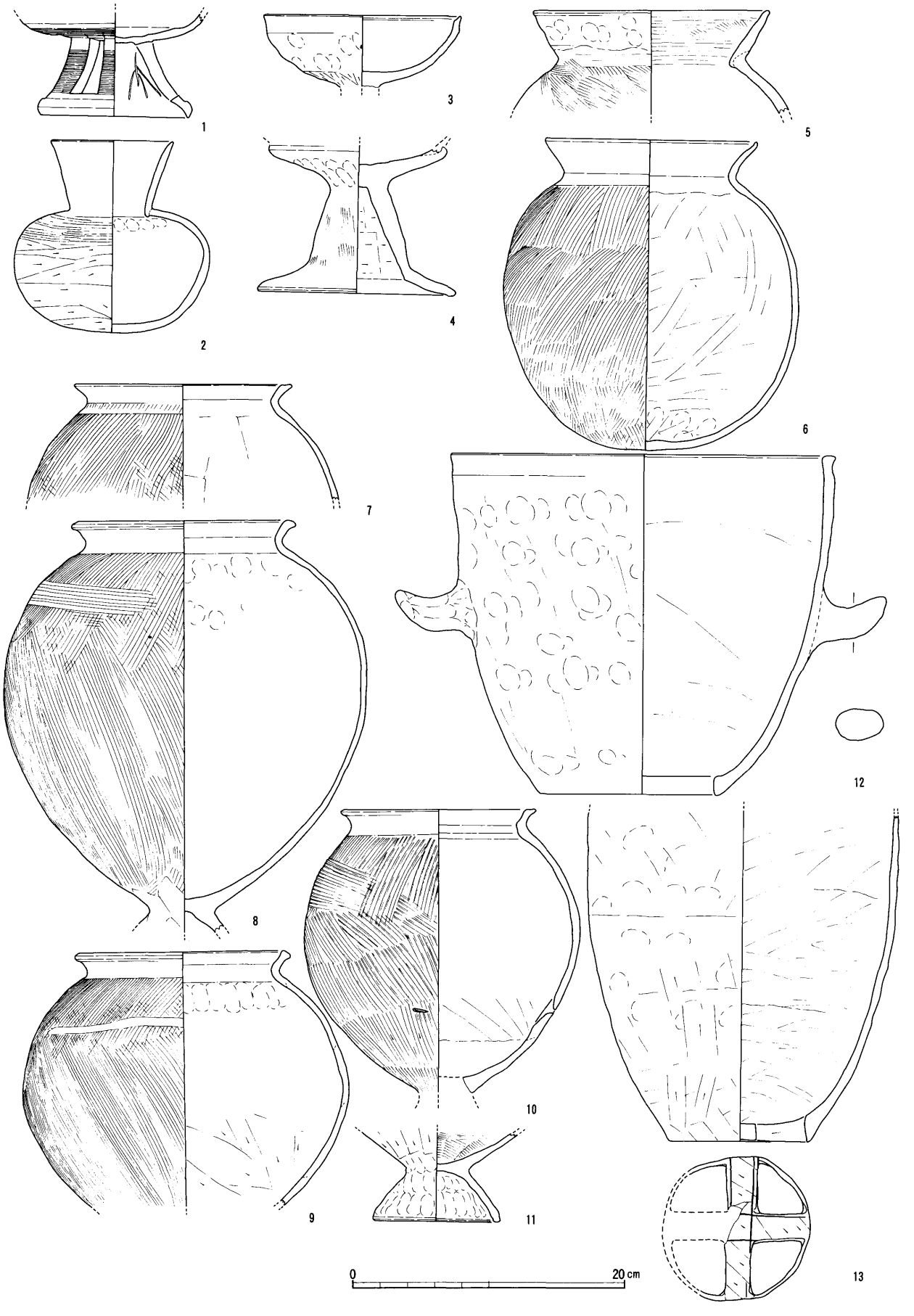
当遺跡は、須恵器の出土は稀であったが、杯蓋(141～142)をあげた。(141) は稜は短く、口縁部は直下に下る。口縁端部は明瞭に内傾する段を持つ。中村浩氏による編年Ⅱ型式１段階にあたる。[13] (142) は口径に比べて器高が低く扁平な感じを受ける。中村浩氏による編年Ⅱ段階２型式にあたる。[14] いずれも６世紀前期中葉のものである。小型平底壺(144～146)は、立上りを持つ厚い平底の(144)、立上りが無くなるが、底部が厚い平底である(145)、立上がりは無くなり底径が大きい(146) がある。山田猛氏による分類のA、B、Cにそれぞれあたる。[15] 小型丸底壺(147)は口縁部と体部とはほぼ同径で、体部は丸みを持つ。山田分類の小型壺丸底壺C類にあたる。[16] 高杯(148) は口縁部がやや外傾し、杯部の稜が僅かに残る。山田分類のE1 にあたる。[18] 高杯(149) は杯の底部と口縁部が一直線になる。山田分類のE2にあたる。[18] 高杯(153) の脚部は直線的な柱状部から折れ曲がる直線的な裾部から成る。裾部の先端は尖る。山田分類のD4 にあたる。[19] 山田編年にいう山城Ｖ式にあたる。[20] 伊勢地方に須恵器が普及し始めた５世後葉ころにあたる。台付甕(155～161)は、いわゆるS字甕であるが、前項で触れた同型種よりも時代は下る。台付甕(155～156) 及び(158～159、161) は口縁部外面のヨコナデが2単位である。山田分類のD2 形式にあたる。[21] 台付甕(157･160)は口縁端部が水平化し面をもつ。山田分類のE形式にあたる。[22] 土師器皿(162)は口縁部にナデが施され、口縁部は素直に伸びる。ロクロ土師器杯(164) は口縁部では若干内彎しながら伸び、端部近くで緩く外湾する。山皿(165、166)はそれぞれ藤澤編年の第２段階４型式及び３段階５型式にあたる。[23] 山茶椀(167) は藤澤編年の第3段階５型式にあたるもので12世紀後半のものである。[24] 山茶椀(168) は(167) よりやや古いものである。底部に墨書が見られる。鍋(170～174)はいわゆる伊勢型鍋である。伊藤裕偉氏の編年によると(170、174)は第１段階a型式、13世紀前葉に属し、(173) は第1段階b型式、13世紀中葉にあたる。(171) は第2段階ａ型式、14世紀初頭に属し、(172) は第2段階c型式、14世紀初頭に属する。甕(175) は伊勢型鍋成立以前の伊藤編年にいう（仮）A段階にあたり12世紀代ものである。[25] 甕(39 ～41、64) と同時期のものである。土製支脚(176) は遺構に伴わない遺物である。上部に煤の付着がみられた。時期は不明である。多気郡明和町掘田遺跡SE42埋土や包含層から複数の出土がある。[26]

4　木製品

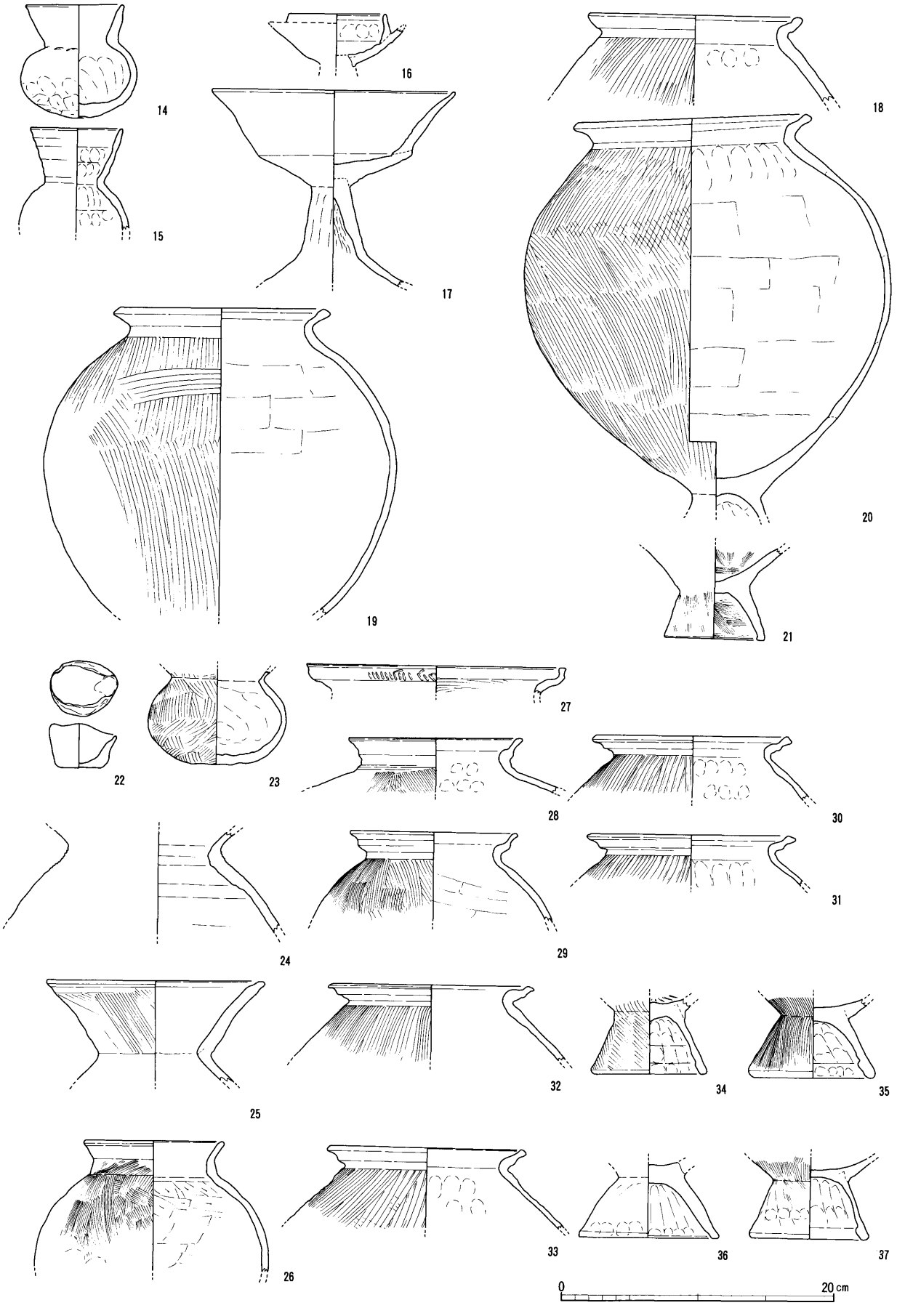
主にSE17から井戸枠の部材及び井戸底部から曲物の底板がある。井戸枠部材(91～ 96) は臍が施されている。組み込まれていたものである。

5　金属製品・その他

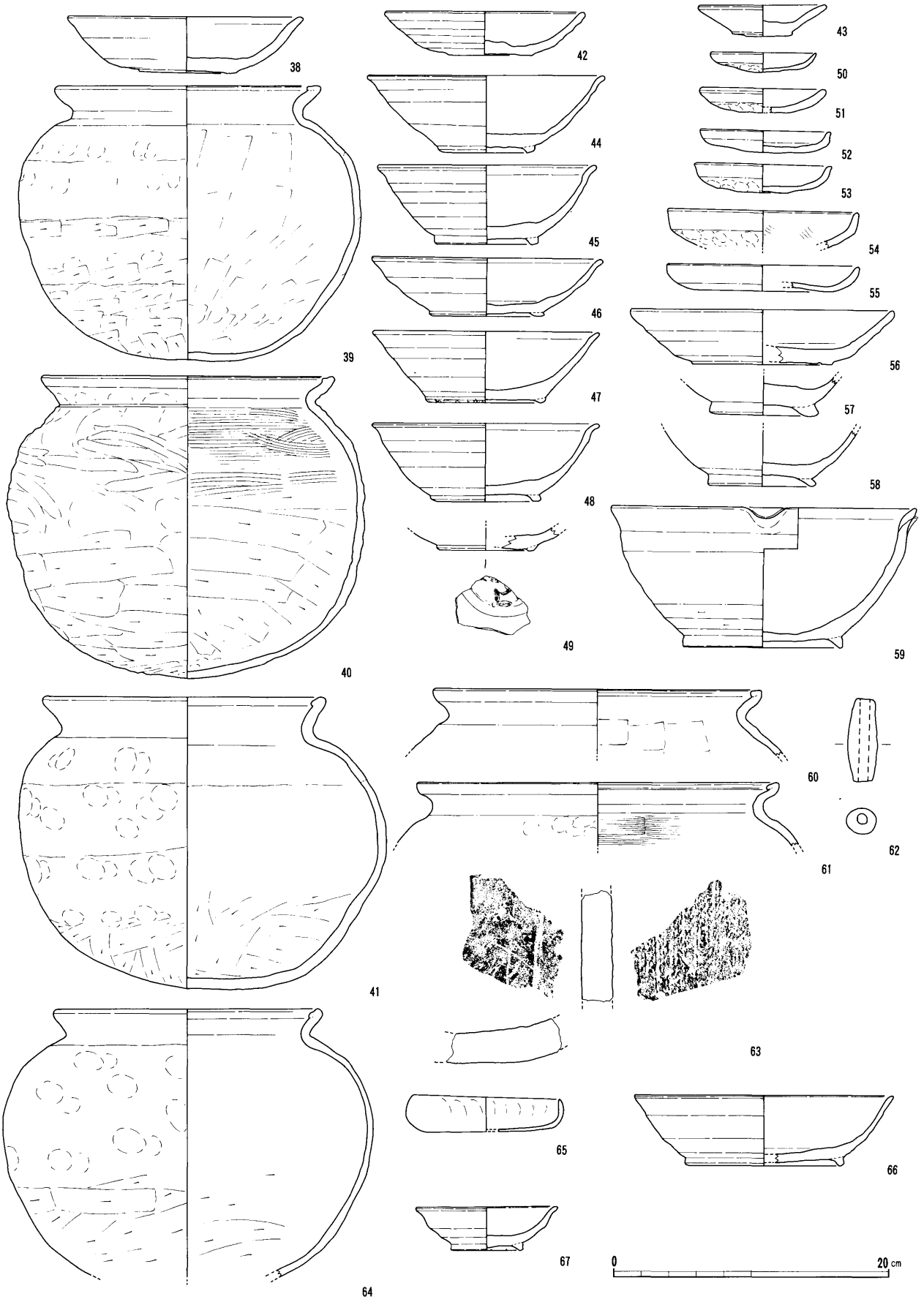
ＳＸ16底部から小刀２振り、不明鉄製品１点、鎌刃部1点が出土している。小刀(97)はほぼ完存状態である。茎部に目釘穴がある。樋のあるところから南北朝時代以降のものである。[27] 鞘(98)は黒漆が施されており糸を巻いた痕跡がみられる。銭貨(180) は北宋の咸平元寶である。初鋳は998 年である。[28]



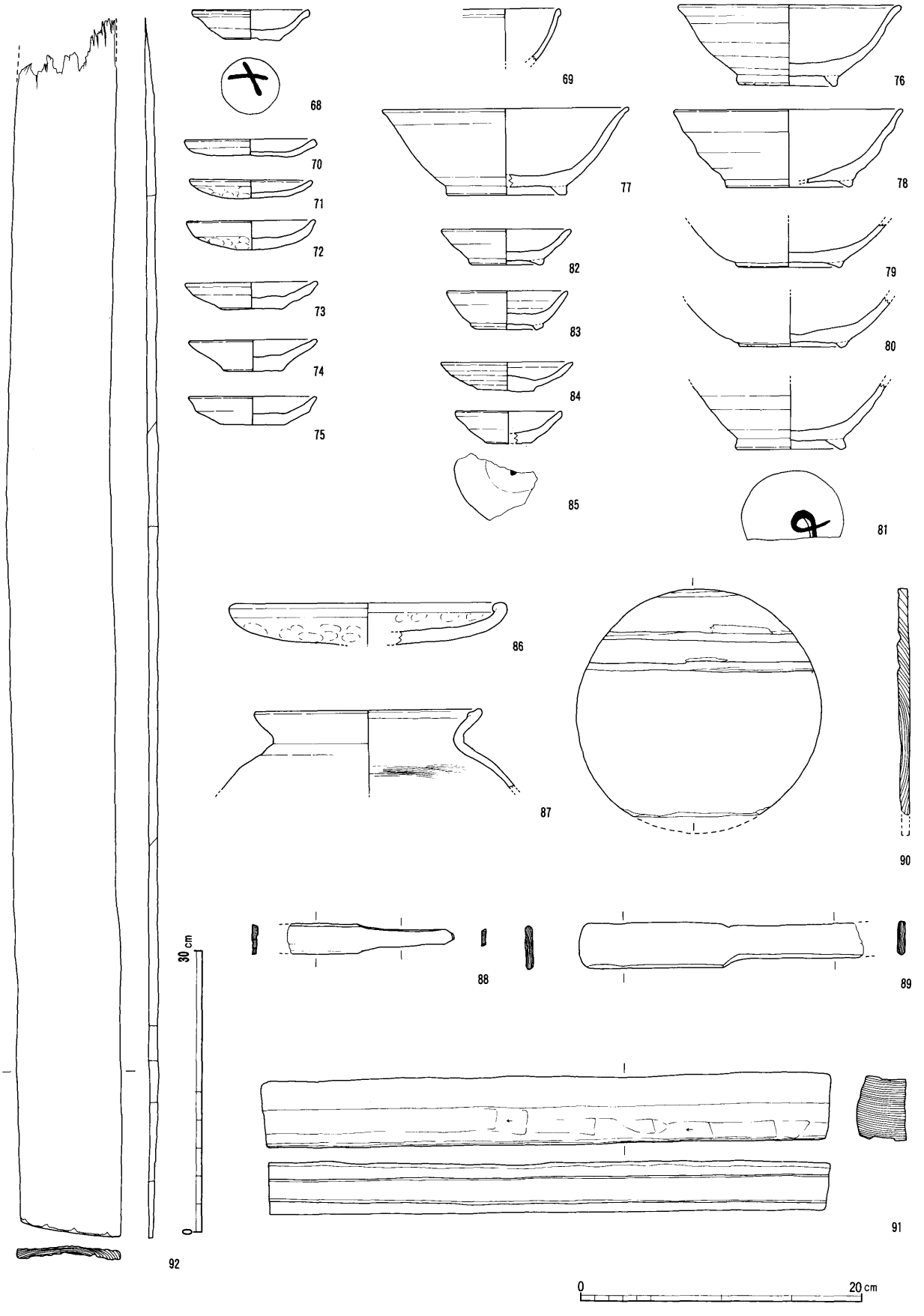
第15図　ＳＫ７（１～13）出土遺物実則図（１：４）



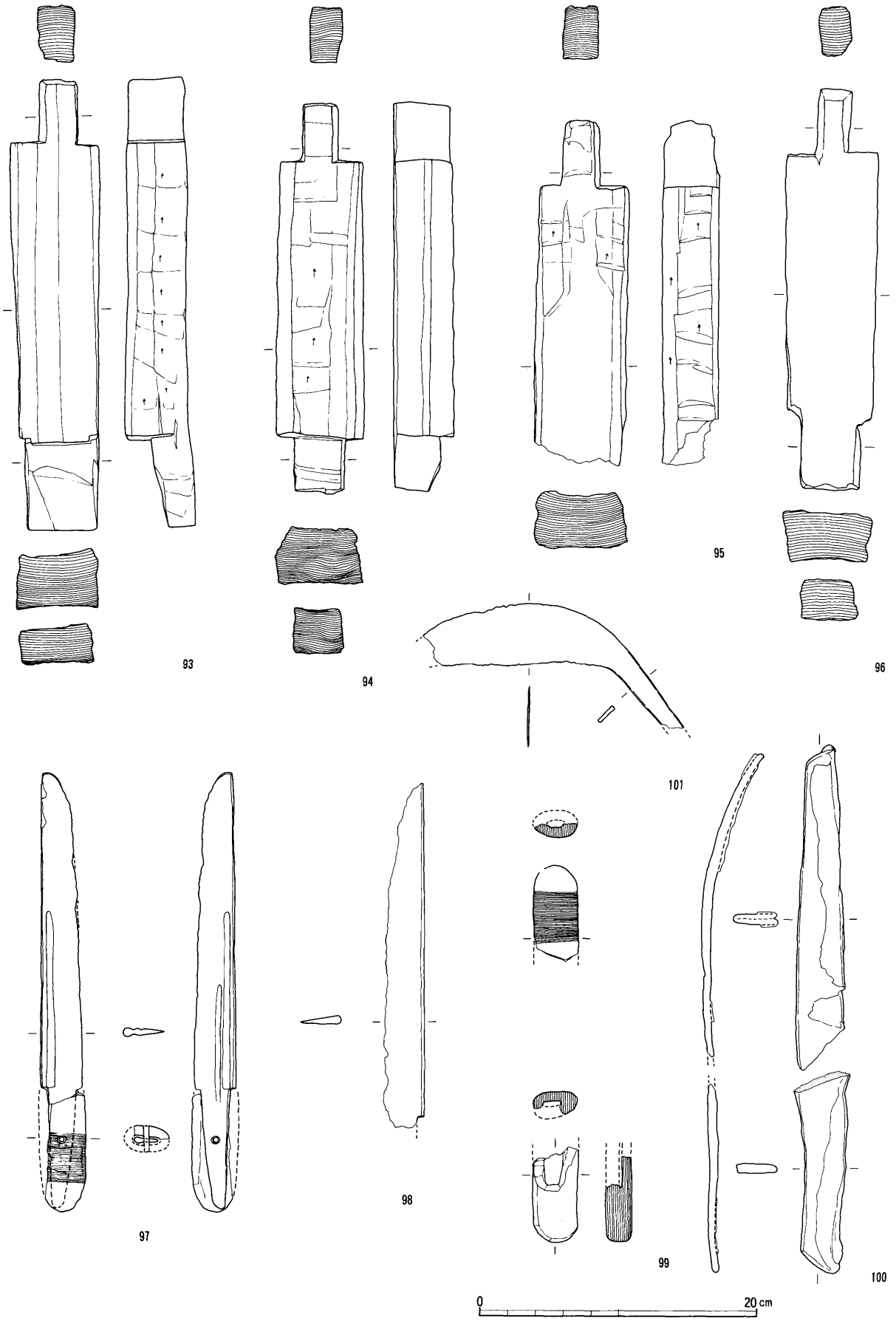
第16図　ＳＫ14（14～21）、ＳＤ10（22～37）出土遺物実則図（１：４）



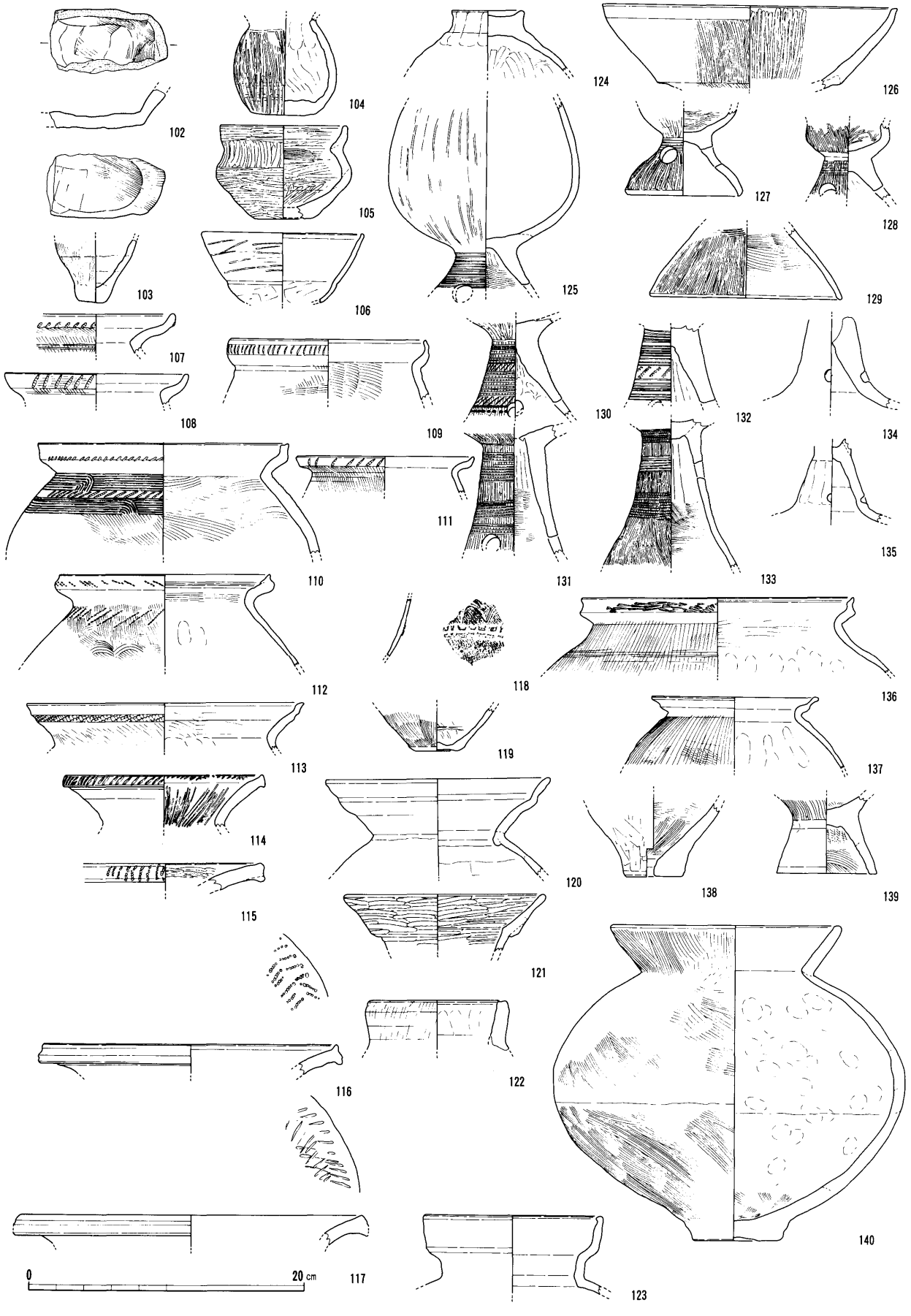
第17図　SK3(38、39)、SK4(40)、SK5(41～43)、SD8(44～49)、SD11(50～63)、SD12、(64、66、67)、SD13(65)
出土遺物実測図（1：4）



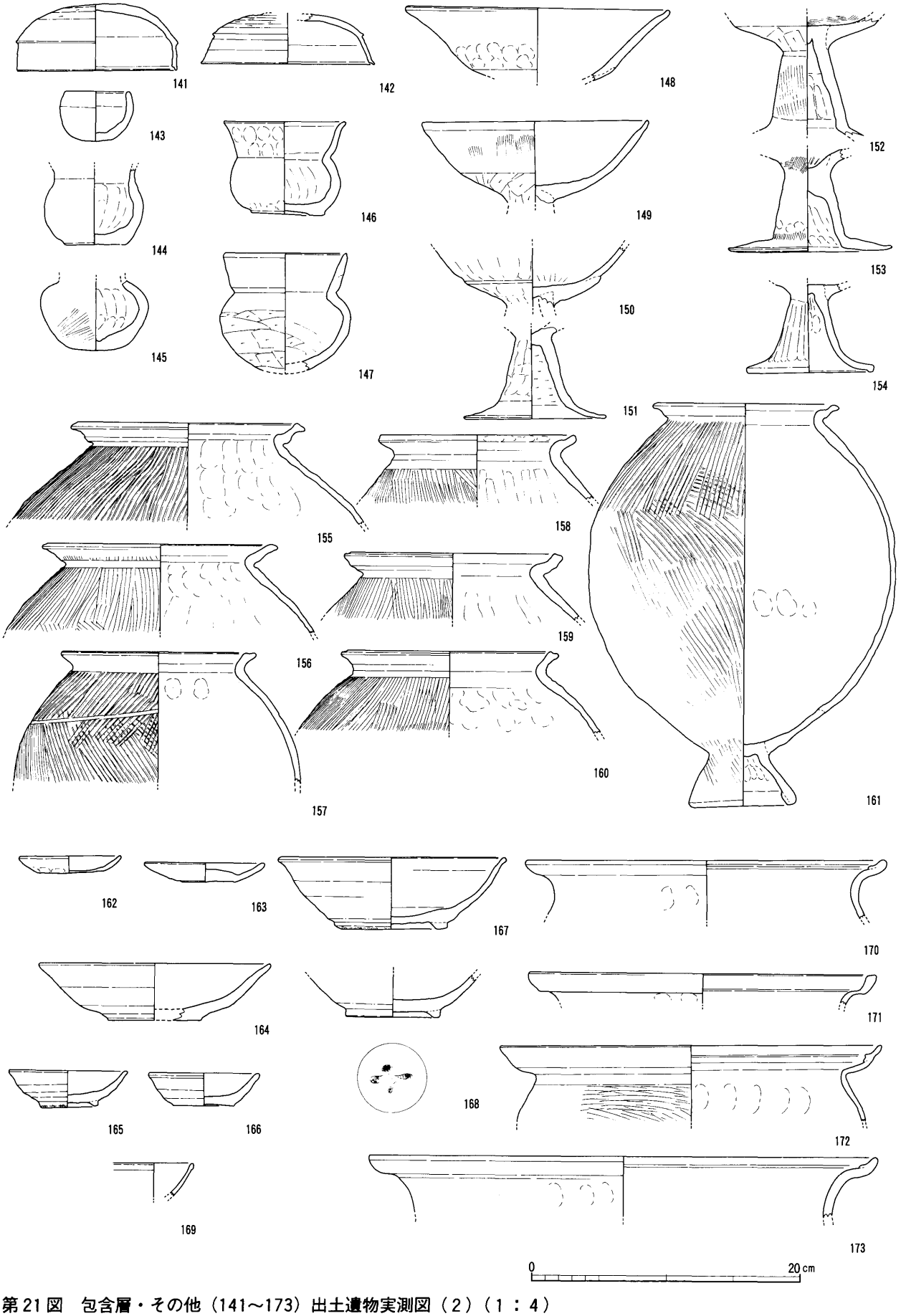
第18図　SD12(88)、SX16(68・69・77)、SE17(70～76、78～87、89～92) 出土遺物実測図 (1:4、92は1:6)



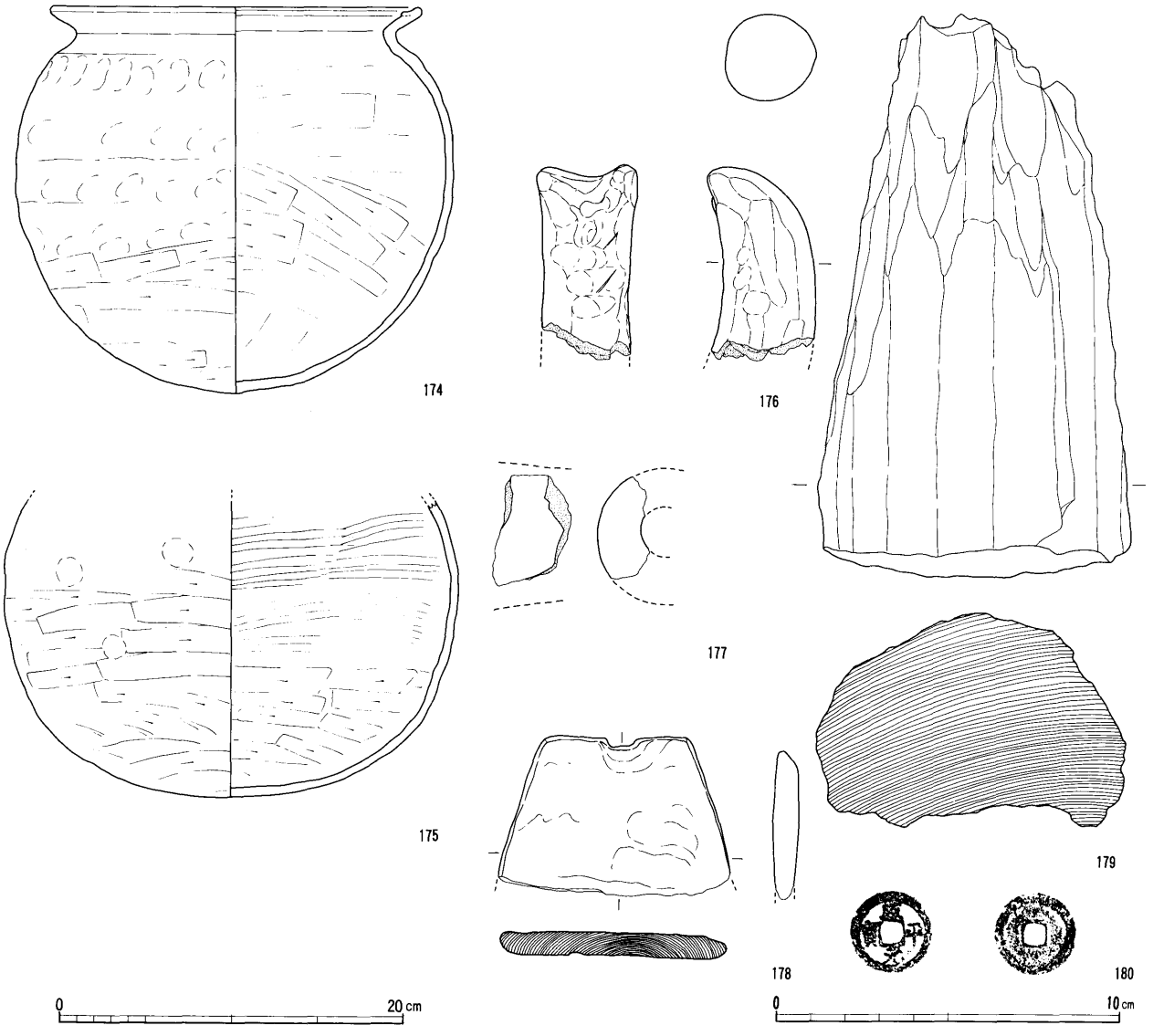
第19図　SX16(97～101)、SE17(93～101) 出土木製品・金属製品実測図（1：4）



第20図　包含層・その他（102～140）出土遺物実測図（1）（1：4）



第21図　包含層・その他（141～173）出土遺物実測図（2）（1：4）



第22図　包含層・その他（174～180）　出土遺物実測図（3）（1：4、180は1：2）

番号	実測番号	名称	地区	遺構・層名	実測寸法(cm) 口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
1	020-01	須恵器　有蓋高杯	A-E10	SK7		10.8		ロクロケズリ→カキメ→ロクロナデ→カキメ→ロクロナデ	やや密	灰	脚部完存	ヘラ記号
2	009-04	土師器　長頸壺	A-E10	SK7	8.7			外面：ナデ→ミガキ→ケズリ	やや粗	橙	ほぼ完存	
3	009-03	土師器　高杯	A-E10	SK7	14.3			外面：ヨコナデ→ナデ後オサエ→ケズリ，内面：ナデ	やや粗	明赤褐	口縁2/3	
4	020-03	土師器　高杯	A-E10	SK7		14.5		ヨコナデ→オサエ・ナデ→ハケ→ヨコナデ→ケズリ	やや粗	橙	ほぼ完存	
5	010-02	土師器　広口壺	A-E10	SK7	17.2			ナデ・オサエ→ハケ	粗	鈍褐	口縁1/2	
6	008-01	土師器　甕	A-E10	SK7	15.4		22.7	外面：ヨコナデ→ハケメ 内面：ヨコナデ→ナデ→工具ナデ→ナデ・オサエ	やや粗	明褐灰	口縁4/5	
7	037-03	土師器　台付甕	A-E10	SK7	15.6			ヨコナデ→ハケメ	粗	鈍黄橙	1/3	頸径14.0cm
8	033-01	土師器　台付甕	A-E10	SK7	15.1			外面：ヨコナデ→ハケ→工具ナデ 内面：ヨコナデ→ナデ	やや粗	浅黄橙	7/8	
9	032-01	土師器　台付甕	A-E10	SK7	15.5			外面：ヨコナデ→ハケ（肩部にナデ），内面：ヨコナデ→オサエナデ→ナデ→ケズリ	やや密	浅黄橙	口縁3/4	
10	021-01	土師器　台付甕	A-E10	SK7	14.3			ヨコナデ→ハケ→ケズリ	やや粗	鈍黄橙	口縁2/3	体部に穿孔
11	020-02	土師器　台付甕	A-E10	SK7		9.4		ケズリ→オサエ→ナデ	やや密	鈍黄橙	脚部完存	
12	031-01	土師器　甑	A-E10	SK7	26.8	12.8		ヨコナデ→工具ナデ後オサエ	やや粗	浅黄橙	4/5	
13	025-01	土師器　甑	A-E10	SK7		10.7		オサエ後ナデ（一部ケズリ有り）→ケズリ	やや粗	鈍橙	1/2	
14	020-05	土師器　小形丸底壺	A-E6	SK14	6.5		8.0	ヨコナデ→オサエ・ナデ→ケズリ	やや粗	橙	完存	

第2表　遺物観察表（1）

番号	実測番号	名称	地区	遺構・層名	実測寸法(cm) 口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
15	011-03	土師器　長頸壺	A-E6	SK14	6.6			ヨコナデ→ナデ	やや密	鈍黄橙	口縁完存	
16	011-04	土師器　高杯	A-E6	SK14	7.0			ヨコナデ→ナデ	粗	灰白	口縁7/8	須恵器を模したもの
17	012-02	土師器　高杯	A-E6	SK14	17.6			ヨコナデ→ナデ	やや粗	黄橙	4/5	
18	011-02	土師器　台付甕	A-E6	SK14				ヨコナデ→ハケ	粗	鈍黄橙	口縁3/16	
19	014-01	土師器　台付甕	A-E6	SK14	16.0			外面：ヨコナデ→タテ＋ヨコ方向にハケメ，内面：ヨコナデ→板ナデ	やや粗	鈍黄橙	1/3	体部最大径26.0cm 外面に煤
20	015-01	土師器　台付甕	A-E6	SK14	16.7			外面：ヨコナデ→ハケメ，内面：ヨコナデ→工具ナデ→ナデ	やや密	鈍黄橙	1/2	外面に煤
21	012-01	土師器　台付甕	A-E6	SK14		7.3		ナデ→ハケ→ナデ	粗	灰白	脚部7/8	
22	022-05	土師器　手捏	A-C6	SD10	4.9	2.9	3.2	外面：ナデ，内面：オサエ	やや粗	浅黄橙	ほぼ完存	
23	022-04	土師器　壺	A-D6	SD10		4.5		ハケ後ナデ	やや粗	鈍黄橙	4/5	
24	043-04	土師器　広口壺	A-D6	SD10	不明			ミガキ→横線→ミガキ→横線→キザミ→ナデ	粗	鈍橙	1/12	
25	041-01	土師器　広口壺	A-D6	SD10	16.0			ヨコナデ→ハケ後ナデ	やや粗	灰白	口縁1/6	
26	043-02	土師器　甕	A-C6	SD10	10.1			ヨコナデ→ハケ	粗	橙	口縁1/5	
27	043-03	土師器　台付甕	A-D6	SD10	19.0			ヨコナデ→キザミ→ヨコナデ	やや粗	灰白	口縁1/10	口縁端部外面に刺突
28	042-05	土師器　台付甕	A-C6	SD10	12.7			ヨコナデ→ハケ	やや粗	灰黄	口縁2/5	
29	043-01	土師器　台付甕	A-C6	SD10	11.2			ヨコナデ→ハケ	やや粗	灰白	口縁1/4	
30	042-02	土師器　台付甕	A-D6	SD10	14.0			ヨコナデ→ハケ	やや粗	灰黄褐	口縁3/8	
31	042-01	土師器　台付甕	A-D6	SD10	14.5			ヨコナデ→ハケ	やや粗	灰褐	口縁3/8	
32	041-02	土師器　台付甕	A-C6	SD10	15.1			ヨコナデ→ハケ	粗	灰白	口縁3/8	
33	042-03	土師器　台付甕	A-D6	SD10	14.0			ヨコナデ→ハケ	粗	鈍黄橙	口縁3/16	
34	041-04	土師器　台付甕	A-C6	SD10		8.2		ハケ→ナデ・オサエ	粗	鈍黄橙	脚部完存	
35	041-03	土師器　台付甕	A-C6	SD10		8.8		ハケ→ナデ・オサエ	粗	灰白	脚部完存	
36	042-04	土師器　台付甕	A-D6	SD10		10.2		ナデ→ナデ・オサエ	やや粗	鈍褐	底部11/16	
37	041-05	土師器　台付甕	A-C6	SD10		8.5		ハケ→ナデ・オサエ	粗	鈍橙	脚部完存	底部内面に炭化物付着
38	009-02	ロクロ土師器　杯	A-D14	SK3	16.8			ロクロナデ→糸切り	やや粗	灰褐	口縁3/5	
39	007-01	土師器　甕	A-D14	SK3	19.0		19.9	外面：ヨコナデ→ナデ・オサエ→ケズリ，内面：ヨコナデ→工具ナデ→ケズリ・オサエ	やや粗	灰白	口縁2/3	
40	023-01	土師器　甕	A-C14	SK4	21.0		22.0	ヨコナデ→ヨコナデ後オサエ→ナデオサエ後太いナデ→ナデオサエ後ケズリ→オサエ・ナデ	粗	淡黄	完存	外面に煤：内面底部に種子の焦げ痕
41	006-01	土師器　甕	A-C12	SK5	20.0			外面：ヨコナデ→ナデ・オサエ→ケズリ 内面：ヨコナデ→ナデ→ケズリ	粗	淡黄橙	7/8	
42	020-04	ロクロ土師器　杯	A-C12	SK5	14.7	6.0	3.2	ロクロナデ→糸切り	やや密	鈍黄橙	完存	
43	021-02	陶器　皿（山皿）	A-C12	SK5	9.4	4.4	2.3	ロクロナデ→糸切り	やや密	灰白	完存	
44	022-03	陶器　椀（山茶椀）	A-E7	SD8	17.0		5.6	ロクロナデ→ヘラ切り→貼付高台	粗	灰	口縁1/3	内面に自然釉
45	036-02	陶器　椀（山茶椀）	A-D8	SD8	15.8	6.8	5.8	ロクロナデ→板目状圧痕→貼付後ヨコナデ	やや密	明紫灰	2/3	
46	036-03	陶器　椀（山茶椀）	A-B8	SD8	16.6	8.0	4.2	ロクロナデ→貼付後ヨコナデ	やや粗	明青灰	1/3	内面に自然釉
47	036-04	陶器　椀（山茶椀）	A-B8	SD8	16.3	8.0	5.2	ロクロナデ→糸切り→貼付後ヨコナデ	密	明青灰	1/3	
48	036-01	陶器　椀（山茶椀）	A-D8	SD8	16.3	7.3	5.7	ロクロナデ→糸切り→貼付後ヨコナデ	やや密	明青灰	4/5	
49	031-02	陶器　椀（山茶椀）	A-D8	SD8		6.2		ロクロナデ→ナデ→貼付高台	やや粗	灰白	高台1/5	底部に墨書
50	017-03	土師器　小皿	A-E6	SD11	7.6		1.4	ヨコナデ→オサエ	やや密	灰白	ほぼ完存	
51	036-06	土師器　小皿	A-E5	SD11	9.0		1.8	ヨコナデ→オサエ	やや粗	灰黄	口縁1/4	
52	017-04	土師器　小皿	A-E5	SD11	9.4		1.6	ナデ→ヨコナデ→ケズリ・ナデ	やや粗	褐灰	口縁2/3	
53	017-05	土師器　小皿	A-E5	SD11	9.8		2.0	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや粗	鈍黄橙	1/2	
54	036-05	土師器　皿	A-B5	SD11	13.7			ヨコナデ→オサエ	密	灰白	口縁1/3	
55	017-02	土師器　皿	A-E5	SD11	13.8		1.9	ナデ→ヨコナデ	やや密	鈍橙	口縁1/4	
56	009-01	ロクロ土師器　杯	A-D5	SD11	19.0			ロクロナデ→糸切り	粗	黄灰	口縁2/11	
57	016-05	陶器　椀（山茶椀）	A-D5	SD11		6.2		ロクロナデ→ナデ→貼付高台	やや密	灰白	高台2/3	
58	016-04	陶器　椀（山茶椀）	A-E5	SD11		7.3		ロクロナデ→糸切り→貼付高台	やや密	灰白	高台1/2	
59	016-01	陶器　鉢	A-E6	SD11	22.0		10.2	外面：ロクロケズリ→貼付高台 内面：ロクロナデ	やや密	灰白	口縁3/8	片口鉢
60	017-01	土師器　鍋	A-E5	SD11	23.7			外面：ヨコナデ，内面：ヨコナデ→工具ナデ	やや粗	鈍黄橙	口縁1/4	外面に煤
61	037-02	土師器　鍋	A-D6	SD11	26.1			ヨコナデ→オサエ・ナデ	粗	灰褐	口縁1/5	
62	016-03	土錘	A-B4	SD11					やや密	鈍赤褐	完存	最長6.0cm、最大径2.1cm、穴径0.7cm、重量22.4g
63	038-01	瓦　平瓦	A-D6	SD11				凸部布目	粗	暗灰	1/5	厚さ2.0cm
64	057-01	土師器　甕	A-D4	SD12	19.2			ヨコナデ→ナデ・オサエ→ケズリ	やや粗	灰白	1/2	体部外面に煤付着

第２表　遺物観察表（２）

番号	実測番号	名称	地区	遺構・層名	実測寸法(cm) 口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
65	035-03	土師器　皿	A-C3	SD13	11.6		2.7	オサエ・ナデ	密	灰白	口縁3/4	歪み大
66	022-02	陶器　椀（山茶椀）	A-C3	SD12	18.8		5.1	ロクロナデ→糸切り→貼付高台	密	灰白	口縁1/6	内面に自然釉
67	022-01	陶器　皿（山皿）	A-D4	SD12	10.2		3.2	ロクロナデ→糸切り→貼付高台	やや粗	灰白	口縁1/2	内面に自然釉
68	005-07	陶器　皿（山皿）	B-D5	SX16	8.0		2.2	ロクロナデ→糸切り	やや密	灰	口縁1/3	底部に墨書
69	035-07	白磁　椀	B-D5	SX16					密	釉：灰白	口縁部片	
70	005-05	土師器　小皿	B-D4	SE17	9.1		1.7	ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや粗	灰白	ほぼ完存	歪み大
71	005-04	土師器　小皿	B-D4	SE17	8.6		1.7	ナデ→ヨコナデ→オサエ	密	淡黄	完存	
72	039-03	土師器　小皿	B-D4	SE17	9.0			ナデ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや粗	灰白	口縁1/8	
73	005-03	ロクロ土師器　小皿	B-D4	SE17	9.2		1.9	ロクロナデ→糸切り	やや粗	鈍黄橙	ほぼ完存	
74	040-01	陶器　皿（山皿）	B-D4	SE17	8.9			ロクロナデ→糸切り	やや粗	黄灰	口縁1/4	
75	040-04	ロクロ土師器　小皿	B-D4	SE17	8.8			ロクロナデ→糸切り	やや粗	浅黄	口縁1/4	
76	005-01	陶器　椀（山茶椀）	B-D4	SE17	15.5	6.7	5.8	ロクロナデ→糸切り	粗	灰白	完存	自然釉
77	035-01	陶器　椀（山茶椀）	B-D5	SX16	17.4	8.4	6.2	ロクロナデ→ヨコナデ→糸切り→貼付高台	密	灰白	1/4	内面に自然釉
78	040-06	陶器　椀	B-D4	SE17	16.2	8.7		ロクロナデ→ナデ→貼付高台	やや粗	灰白	高台2/7	
79	039-05	陶器　椀（山茶椀）	B-D4	SE17		7.2		ロクロナデ→ナデ→貼付高台	粗	灰	1/2	
80	039-04	陶器　椀（山茶椀）	B-D4	SE17		7.2		ロクロナデ→ナデ→貼付高台	やや粗	灰	2/3	高台部にモミガラ痕
81	005-02	陶器　椀（山茶椀）	B-D4	SE17		7.5		ロクロナデ→貼付後ナデ	やや密	灰白	高台1/2	底部に墨書
82	040-03	陶器　皿（山皿）	B-D4	SE17	9.0	4.8		ロクロナデ→ナデ→貼付高台	やや粗	灰白	1/3	内面に自然釉
83	040-05	陶器　皿（山皿）	B-D4	SE17	8.4	4.3		ロクロナデ→ナデ→貼付高台	密	灰白	2/5	
84	005-06	陶器　皿（山皿）	B-D4	SE17	7.2		2.2	ロクロナデ→糸切り	粗	灰白	口縁2/3	
85	040-02	陶器　皿（山皿）	B-D4	SE17	7.4			ロクロナデ→糸切り	やや粗	灰白	口縁1/5	底部外面に墨書
86	039-02	土師器　甕蓋	B-D4	SE17	18.8			ナデ・オサエ→ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや粗	灰褐	口縁1/8	口縁部に煤付着
87	039-01	土師器　甕	B-D4	SE17	15.8			ヨコナデ→ナデ	粗	灰黄褐	口縁1/6	体部に煤付着
88	001-03	木製　箆	A-E5	SD12	—	—	—	残存長11.5cm　厚さ0.4cm	—	—	ほぼ完存	木製
89	026-01	木製　箆	B-D4	SE17	—	—	—		—	褐	4/5	残存長20cm、幅6cm
90	029-01	木製　曲物底	B-D4	SE17	—	—	—	直径16.8cm　厚さ0.9cm	—	褐	ほぼ完存	
91	027-02	木製　井戸枠	B-D4	SE17	—	—	—		—	褐	完存	全長40cm、幅4cm
92	030-01	木製　井戸枠	B-D4	SE17	—	—	—		—	褐	不明	残存長130cm　幅10.9cm　厚さ1.0cm
93	028-02	木製　井戸枠	B-D4	SE17	—	—	—	ホゾ	—	褐	完存	全長32cm、幅6cm
94	026-02	木製　井戸枠	B-D4	SE17	—	—	—	ホゾ	—	褐	完存	全長28cm、幅6cm
95	027-01	木製　井戸枠	B-D4	SE17	—	—	—	ホゾ	—	褐	3/4	残存長21cm、幅6cm
96	028-01	木製　井戸枠	B-D4	SE17	—	—	—	ホゾ	—	褐	完存	全長28cm、幅6cm
97	002-02	小刀	B-D5	SX16	—	—	—	刀長31.2cm（刀身22.6cm　茎8.6cm），最大幅2.9cm　目釘孔径0.4cm	—	—	完存	平造　刀身に樋あり
98	003-01	小刀 刀身	B-D5	SX16	—	—	—	刀身長24.0cm　最大幅2.8cm	—	—	刀身完存	平造
99		小刀 鞘	B-D5	SX16	—	—	—	残存長8.0cm　目釘孔あり	—	—	1/3	木製黒漆塗り
100	004-01	不明 鉄製品	B-D5	SX16	—	—	—	長さ36.0cm　最大幅3.3cm	—	—	—	刀未製品
101	002-01	鎌	B-D5	SX16	—	—	—	残存長19.8cm　幅4.4cm　厚さ0.2cm	—	—	—	
102	046-05	土師器　（器種不明）	A-B12	表土				ハケ及びケズリ	やや粗	鈍橙	不明	底厚0.9cm
103	034-04	土師器　鉢	A-E13	pit1		2.0		ハケ後ナデ	密	鈍橙	4/5	
104	034-02	土師器　小形壺	A-E8	pit1		4.6		ハケ後ミガキ	やや粗	鈍黄橙	2/3	
105	019-01	土師器　小形壺	A-A9	西壁面	9.2	4.1	6.8	ヨコナデ→ミガキ→ナデ	密	灰赤	1/2	
106	046-04	土師器　鉢	A-B10	包含層	11.6			ミガキ（横方向）→ケズリ	やや粗	橙	口縁1/5	
107	036-07	土師器　甕	A-B5	SD11				ヨコナデ→刺突→ハケメ→横線	やや粗	淡黄	口縁部片	
108	035-05	土師器　甕	A-D4	SD12	13.2			ヨコナデ→ハケ後ナデ（口縁端部外面に刺突）	やや粗	鈍黄橙	口縁1/6	
109	051-02	弥生土器　受口甕	A-B12	包含層	14.1		4.0	ヨコナデ→刺突→ハケメ後ヨコナデ	やや密	橙	口縁1/8	
110	010-01	土師器　広口壺	A-C10	包含層	18.2			外面：ヨコナデ→ミガキ→横線文→ミガキ→横線文→ハケオサエ	粗	橙	口縁2/3	
111	035-04	土師器　甕	A-D4	SD12	12.7			ヨコナデ→ハケ（口縁端部外面に刺突）	やや粗	灰黄褐	口縁1/4	
112	044-03	土師器　甕	A-C10	包含層	16.0			刺突文→ヨコナデ→刺突文→ハケ	やや粗	灰白	口縁3/4	
113	050-04	土師器　壺	A-D14	包含層	20.2		3.5	ヨコナデ→刺突→ハケ後ヨコナデ	密	鈍橙	口縁1/6	
114	050-03	土師器　広口壺	A-A9	包含層	14.4		3.8	ヨコナデ後刺突→ヨコナデ	やや粗	鈍橙	口縁1/4	口縁部内面にミガキ
115	051-01	土師器　壺	A-D8	包含層				ヨコナデ→刺突後ヨコナデ→ヨコナデ→ハケ後ヨコナデ	やや粗	鈍褐	口縁破片	
116	034-06	土師器　広口壺	A-C8	pit1	21.4			ヨコナデ（口縁端部内面に刺突痕あり）	やや粗	灰白	口縁1/13	

第２表　遺物観察表（３）

番号	実測番号	名称	地区	遺構・層名	実測寸法(cm) 口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
117	034-05	土師器　広口壺	A-C2	pit1	12.5			ヨコナデ（口縁端部内面に刺突痕あり）	粗	鈍橙	口縁1/9	
118	053-05	土師器　甕	B-C11	包含層				波状文→ハケ→突帯	やや粗	褐灰	体部破片	近江系
119	051-04	土師器　甕	A-B10	包含層		3.2	3.1	タテハケ→ナデ	やや密	鈍黄橙	底部のみ	
120	035-02	土師器　二重口縁壺	A-E5	SD12	16.2			ヨコナデ→ナデ	密	灰白	口縁1/6	
121	050-01	土師器　椀	A-C4	包含層	15.6		4.2	ミガキ（ヨコ）→ナデ	粗	鈍黄橙	1/6	
122	034-01	土師器　壺	A-B9	pit2	10.0			ヨコナデ後オサエ→オサエ→ヨコナデ後ハケ	密	灰黄褐	口縁1/3	
123	050-05	土師器　壺	A-A7	包含層	12.8		5.8	ヨコナデ	やや粗	橙	口縁1/8	
124	051-03	土師器　甕蓋	A	包含層	5.2		4.4	ナデ→指オサエ→ナデ	粗	黒褐	ツマミ部1/3	
125	045-01	土師器　高杯	A-C10	包含層				ミガキ→櫛描横線文→三方透かし（内面：ハケメ）	密	橙	1/2	体部最大径13.6cm
126	018-05	土師器　高杯	A-C10	包含層	21.5			ヨコナデ→ミガキ	粗	鈍褐	口縁1/8	
127	018-06	土師器　高杯	A-C12	包含層		8.0		ミガキ→横線→ハケ後ミガキ→横ナデ	やや粗	鈍橙	脚部完存	3方透かし
128	047-05	土師器　高杯	A	表土				ミガキ→三方透かし	やや粗	鈍橙	1/5	脚部のみ存
129	050-02	土師器　高杯	A-B10	包含層		14.0	5.1	ミガキ→ヨコナデ	密	橙	脚部1/4	
130	047-04	弥生土器　高杯	A-C8	表土				ミガキ→竹管文→ミガキ→櫛描横線文→四方透かし	やや粗	橙	1/5	脚部のみ存（刺突あり）
131	047-01	弥生土器　土師器	A	表土				ミガキ→櫛描横線文→ヘラミガキ→櫛描横線文→透かし	やや粗	鈍黄橙	1/5	脚部のみ存
132	037-01	弥生土器　高杯	A-E5	SD11				櫛描横線→クシ刺突→櫛描横線→３方透かし	粗	鈍橙	脚部のみ存	
133	051-07	土師器　高杯	A-D10	包含層				ミガキ→ミガキ後櫛描黄線文→透かし→ミガキ後櫛描黄線文→	やや密	鈍橙	1/5	透かし孔は二段 残存長10.8cm
134	050-06	土師器　高杯	A-C11	包含層			6.3	ナデ→透かし	粗	橙	脚部1/4	貫通しない円孔あり
135	051-06	土師器　高杯	A-E6	包含層			6.0	工具ナデ→ヨコナデ→透かし	やや粗	明赤褐	1/5	貫通しない円孔あり
136	046-01	土師器　台付甕	A	包含層	19.9			ヨコナデ→刺突→ハケ	やや粗	灰白	口縁1/4	
137	052-04	土師器　台付甕	A-C4	包含層	12.0			ヨコナデ→ハケ	やや粗	鈍橙	口縁1/4	
138	051-05	土師器　壺	A-C12	包含層		4.0	5.3	ケズリ→ナデ	粗	鈍橙	底部のみ	
139	034-03	土師器　台付甕	A-C10	pit3		7.3		ハケ→ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	鈍橙	脚部完存	
140	056-01	土師器　広口壺	A	表土	16.5	6.2		ハケ→ナデ	やや粗	鈍赤褐	口縁1/4	
141	018-04	須恵器　杯蓋	A-E10	包含層	11.7	5.0		ロクロケズリ→ロクロナデ	粗	灰	口縁1/3	外面に自然釉
142	052-01	須恵器　杯蓋	A-C15	包含層	12.9			ロクロケズリ→ロクロナデ	やや粗	灰	口縁1/5	
143	019-03	土師器　ミニチュア鉢	A-A9	包含層	4.6		3.7	ヨコナデ→オサエ・ナデ	粗	鈍橙	口縁3/4	
144	018-07	土師器　小形壺	A-B13	包含層		4.4		ヨコナデ→オサエ・ナデ	やや密	鈍赤褐	1/3	
145	046-03	土師器　小形壺	A	表土		2.6		ナデ→ハケ→工具ナデ	やや粗	鈍橙	3/4	
146	011-01	土師器　小形壺	A-E13	包含層	8.8	5.4		オサエ→ナデ→オサエ	密	鈍褐	4/5	
147	019-02	土師器　小形丸底壺	A-C4	包含層	9.0			ヨコナデ→ナデ→ケズリ	粗	灰褐	口縁1/3	
148	044-02	土師器　高杯	A-E8	包含層	19.6			ヨコナデ→オサエ・ナデ	やや粗	鈍褐	口縁1/2	杯部のみ存
149	046-02	土師器　高杯	A-C8	表土	16.7			ヨコナデ→ハケ後ナデ→ケズリ	やや粗	橙	口縁1/3	
150	053-03	土師器　高杯	A-D14	包含層				ナデ・オサエ	密	鈍橙	杯部1/3	杯のみ存
151	053-04	土師器　高杯	A-C12	包含層		10.5		ナデ→ヨコナデ	密	鈍橙	底部1/8	脚部のみ存
152	047-02	土師器　高杯	A-C8	表土				ナデ→ケズリ→ハケメ→ケズリ	やや粗	浅黄橙	1/5	脚部のみ存
153	044-01	土師器　高杯	A-A9	包含層		12.3		ハケ→オサエ・ナデ→ハケ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密	鈍黄橙	1/2	脚部のみ存
154	047-03	土師器　高杯	A-C8	表土		9.0		ミガキ→ナデ	やや粗	橙	1/5	脚部のみ存
155	054-01	土師器　台付甕	A-A7	包含層	16.2			ヨコナデ→ハケ	やや粗	鈍黄橙	口縁1/4	
156	053-01	土師器　台付甕	A-A9	包含層	16.6			ヨコナデ→ハケ→ヨコナデ→ハケ	やや粗	鈍黄橙	口縁1/5	
157	044-04	土師器　台付甕	A-A9	包含層	14.5			ヨコナデ→ハケ	やや粗	鈍橙	口縁3/4	
158	052-05	土師器　台付甕	A-A9	包含層	14.4			ヨコナデ→ハケ	やや粗	明褐灰	口縁1/5	
159	052-06	土師器　台付甕	A-A10	包含層	15.0			ヨコナデ→ハケ	やや粗	鈍橙	口縁1/4	
160	053-02	土師器　台付甕	A-E11	包含層	15.0			ヨコナデ→ハケ	密	灰白	口縁1/3	
161	055-01	土師器　台付甕	A-A10	包含層	13.9	8.1	29.9	ヨコナデ→ハケ	やや粗	灰白	1/2	
162	013-01	土師器　皿	A-E13	包含層	7.7		1.3	内面：ナデ　外面：オサエ	密	橙	口縁5/6	
163	048-04	ロクロ土師器　小皿	A-E5	包含層	8.6		1.4	ロクロナデ→糸切り	やや密	鈍黄橙	口縁1/3	
164	048-03	ロクロ土師器　杯	A-D12	包含層	17.0	6.8	4.2	ロクロナデ→ナデ→糸切り	やや密	鈍黄橙	口縁1/3	
165	018-02	陶器　皿（山皿）	A-E14	包含層	8.7	3.7	2.7	ナデ→ロクロナデ→貼付後ナデ	やや密	灰白	口縁5/6	高台部にモミガラ痕
166	018-03	陶器　皿（山皿）	A-C15	包含層	8.0	4.5	2.4	ロクロナデ→糸切り	密	灰	口縁2/3	
167	018-01	陶器　椀（山茶椀）	A	包含層	16.6	7.0	5.4	ロクロナデ→糸切り→貼付後ナデ	粗	灰白	口縁2/3	高台部にモミガラ痕
168	048-05	陶器　椀（山茶椀）	A-E5	表土				ロクロナデ→ヨコナデ→糸切り→貼付高台	密	灰白	1/2	底部に墨書
169	049-03	白磁　椀	A-E11	包含層				施釉	密	灰白	口縁部片	

第２表　遺物観察表（４）

番号	実測番号	名称	地区	遺構・層名	実測寸法(cm) 口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
170	048-02	土師器　鍋	A-E6	包含層	26.9			ナデ→ヨコナデ→ナデ	やや密	灰黄褐	口縁1/6	
171	049-02	土師器　鍋	A-C2	包含層	25.8			ヨコナデ→オサエ・ナデ	密	明褐灰	口縁1/12	歪み大
172	049-01	土師器　鍋	A-E6	包含層	28.4			ヨコナデ→ハケ	やや密	浅黄橙	口縁1/8	
173	048-01	土師器　鍋	A-E9	包含層	37.8			ナデ→ヨコナデ→オサエ・ナデ	密	黒褐	口縁1/9	
174	024-01	土師器　鍋	A-D12	包含層	21.4		22.4	オサエ・ナデ→ケズリ→ナデ・ケズリ	やや粗	浅黄	3/4	
175	013-02	土師器　甕	A-E11	SK6				ナデ→ヘラケズリ、内面に横方向ハケメ	粗	浅黄橙	1/2	体部最大径26.5cm
176	019-04	土製支脚	A	包含層				オサエ→ナデ　残存長9.5cm　体部長径5.8cm	粗	浅黄橙	1/2	外面上部に煤付着
177	049-04	土製品　鞴　羽口	A-D13	包含層	8.0				やや粗	灰白	1/5	
178	001-01	有円孔台形板	A	表土	—	—	—	短辺8.5cm　厚さ1.2cm	—	—	2/3	木製
179	058-01	木製　柱痕	A-C7	pit1				長さ28cm、材質不明	—	褐		長径18cm、短径12.7cm
180	002-03	銭貨(咸平元寶)	試掘	No.33	2.3			内孔　方形0.6cm	—	—	完存	北宋咸平元年（998）初鋳

第2表　遺物観察表（5）

［註］

① 土師器皿・小皿、ロクロ土師器杯・小皿の分類は、前川嘉宏「曲遺跡」『県道丹生寺一志線及び県道合ケ野松阪線道路改良工事敷地内埋蔵文化財発掘調査報告書』松阪市教育委員会 1989 を参考にした。

② 伊藤裕偉『宮ノ腰遺跡発掘調査報告Ⅰ』三重県埋蔵文化財センター 1997　報告の遺物番号125の有蓋高杯を参照されたい。

③ 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Miehistory vol.1』三重歴史文化研究会 1992）。

④ 前掲③に同じ。

⑤ 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要第3号』三重県埋蔵文化財センター 1994

⑥ 前掲⑤に同じ。

山田				大参	安達	赤塚
大和の類例	時期	高杯	S字甕	S字甕	S字甕	S字甕
	Ⅴ様式古段階	A_1				
	Ⅴ様式新段階	A_2				
	欠山様式古段階	B_1				
	欠山様式中段階	B_2	A_1	a	Ⅰ	A
	欠山様式新段階	B_3	A_2	b	Ⅱ	B
坂田寺下層	元屋敷様式（＝山城Ⅰ式）	C	B		ⅢA	C
上ノ井手遺跡 SD031	山城Ⅱ式	D_1	C		ⅢB	
上ノ井手遺跡 SE030下層	山城Ⅲ式	D_2	D_1	c	ⅣA	D
上ノ井手遺跡 SE030上層	山城Ⅳ式	D_3	D_2	+	ⅣB	
	山城Ⅴ式	D_4	E		ⅤA	宇田
	6世紀第1・四半期		F_1		ⅤB	
	6世紀第2・四半期		F_2			
	6世紀第3・四半期		F_3			

⑦ 前掲⑤に同じ。

⑧ 前掲⑤に同じ。

⑨ 寺沢薫、森岡秀人編『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社 1990

⑩ 前掲②に同じ。遺物番号104土師器高杯を参照されたい。

⑪ 山田猛「結語」『山城遺跡・北瀬古遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1994。同書62ページから型式編年対照表を転載。

⑫ 前掲⑪に同じ。

⑬ 中村浩ほか『陶邑Ⅰ』大阪府教育委員会 1976。

⑭ 前掲⑪に同じ。

⑮ 前掲⑪に同じ。

⑯ 前掲⑪に同じ。

⑰ 前掲⑪に同じ。

⑱ 前掲⑪に同じ。

⑲ 前掲⑪に同じ。

⑳ 前掲⑪に同じ。

㉑ 前掲⑪に同じ。

㉒ 前掲⑪に同じ。

㉓ 前掲⑤に同じ。

㉔ 前掲⑤に同じ。

㉕ 前掲③に同じ。

㉖ 伊藤久嗣・伊勢野久好「多気郡明和町　堀田遺跡」（『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1981）

㉗ 小林秀氏の御教示による

㉘ 永井久美男編『中世の出土銭』兵庫埋蔵銭調査会 1994

V 結　語

上ノ庄北出遺跡は、掘坂山系に源を発する中小河川が形成した沖積平野上に立地する遺跡である。

A地区包含層からは弥生土器及び古墳時代前期の土師器が出土した。検出した土坑や溝と考え合わせて、沖積平野上に点在する小集落の１つであったのではなかろうか。

ところで、本遺跡周辺は自然の堆積が繰り返されてきたうえに、圃場整備事業が実施され旧地形が改変、小河川の付け替えが行われているので遺跡の広がりはつかめていない。平成7年11月に実施した試掘調査においてはA地区とB地区間には遺構の検出は無く、遺物も少量であった。B地区も遺構密度は薄く、B地区以南は試掘調査時に遺構は無かった。ゆえに、本遺跡の北端をこのあたりと推定する。この付近は伊藤裕偉が『宮ノ腰遺跡発掘調査報告Ⅰ』（三重県埋蔵文化財センター 1997）で推定している醍醐寺領曽祢庄推定庄域の末端にあたりその推定を裏付けるものと考える。なお、今回の調査は、県道の付け替え工事の予定地内であるため南北方向に細長い2調査区を対象としているため遺跡の東西方向への範囲確認には及んでいない。

平成８、９年度に亘って調査を実施した宮ノ腰遺跡に、より近接するA地区南部から集落跡と考える根拠となる多数のピットを検出した。しかし、そのピット群を有機的に組み合わせて建物群を復元することには至らなかった。時期的には根石の存在、方位的位置関係によって同時期と考えられる複数の溝との関連から中世前期の集落跡と考えられる。B地区については、遺構密度が薄く、主な遺構としてＳＸ 16とSE17をあげるにとどまる。この2つの遺構は約３m離れている。両遺構から出土した山茶椀、山皿から同時期のものと考えられるがSX16出土の小刀の刀部に樋があることから、ＳE17のほうがSX16より古いと考える。

以上のことから上ノ庄北出遺跡周辺に遅くとも古墳時代後期には小集落の存在が窺え、何らかの事情により小集落が廃絶し、その後、次に人の生活痕跡が見られるのは平安時代末期から鎌倉時代前半と考えられる。その当時、当遺跡は醍醐寺領曽祢庄の庄境付近であったと推定される。

［註］

① 本書　Ⅲ層位と遺構　註①を参照。

参考文献

前川嘉宏　『粥鍋遺跡発掘調査報告』松阪市教育委員会　1987
前川嘉宏　「曲遺跡」『県道丹生寺一志線及び県道合ケ野松阪線道路改良工事敷地内埋蔵文化財発掘調査報告』 松阪市教育委員会　1989

調査前風景（南から）

A 地区全景（北から）

図版 2

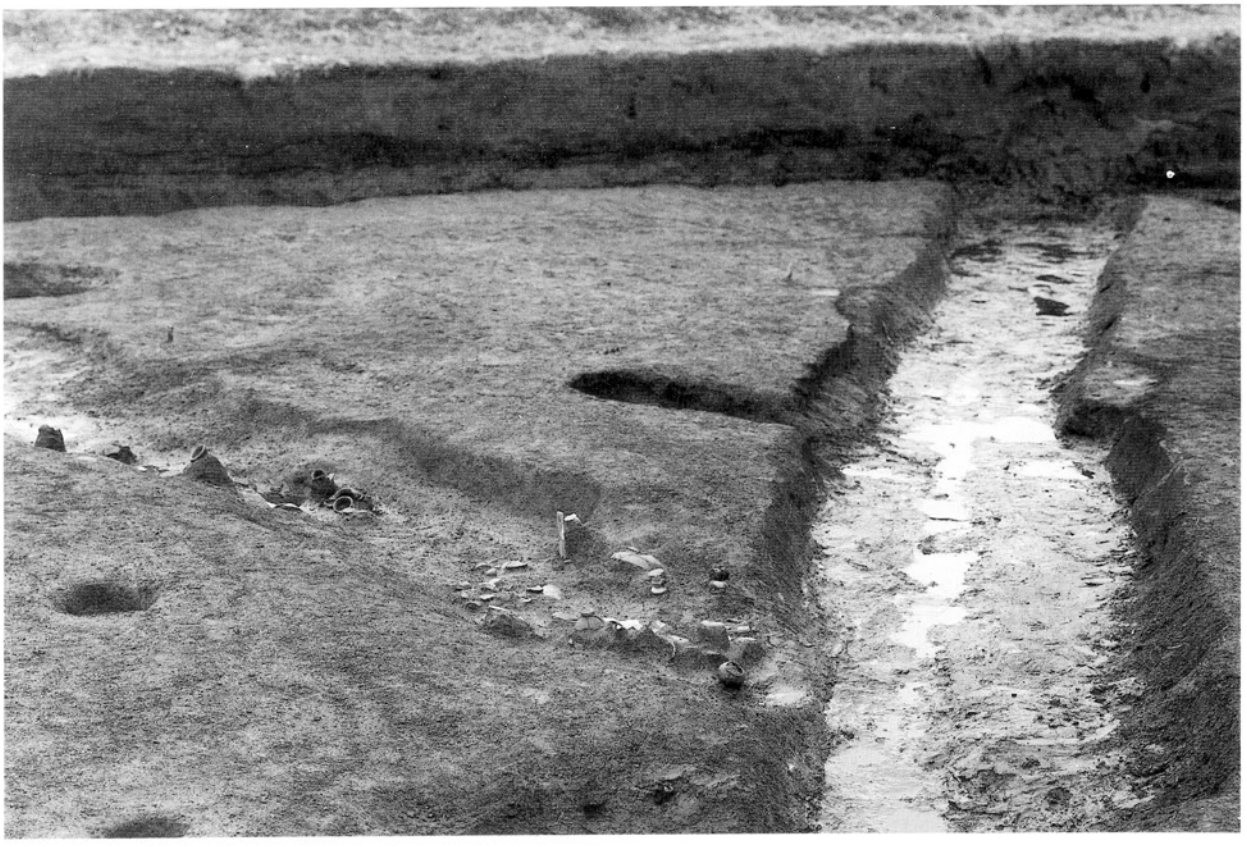
Ｂ地区全景（南から）

ＳＸ 16（北から）

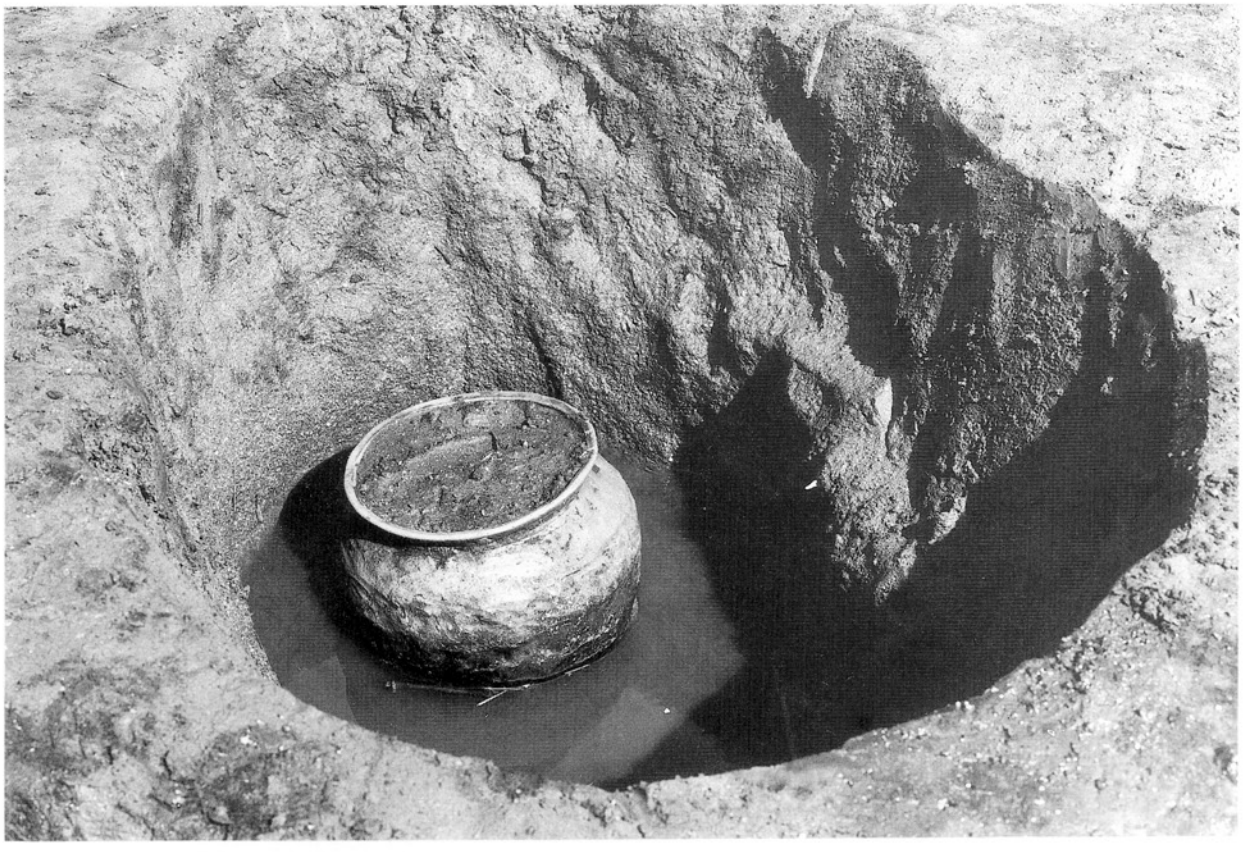
ＳＫ７（東から）

ＳＫ 14（北から）

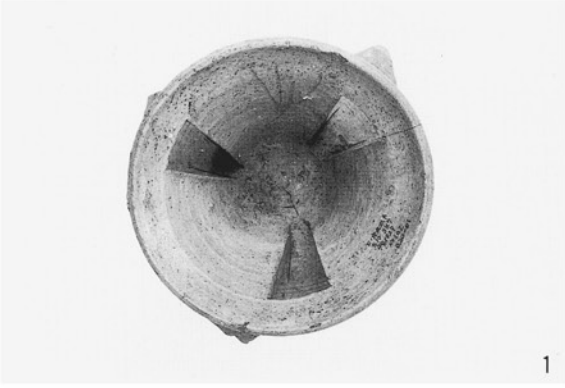
図版４

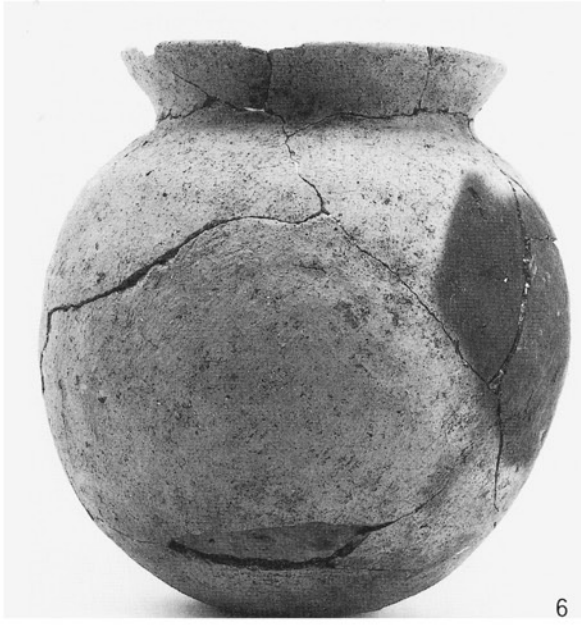


ＳＤ 10 とＳＤ 11 （東から）



ＳＫ４（西から）





出土土器（1：3）

図版 6

13

50

43

42

12

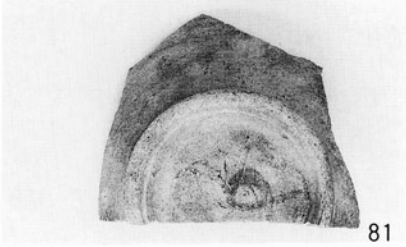
出土土器（1：3）

62

63

73

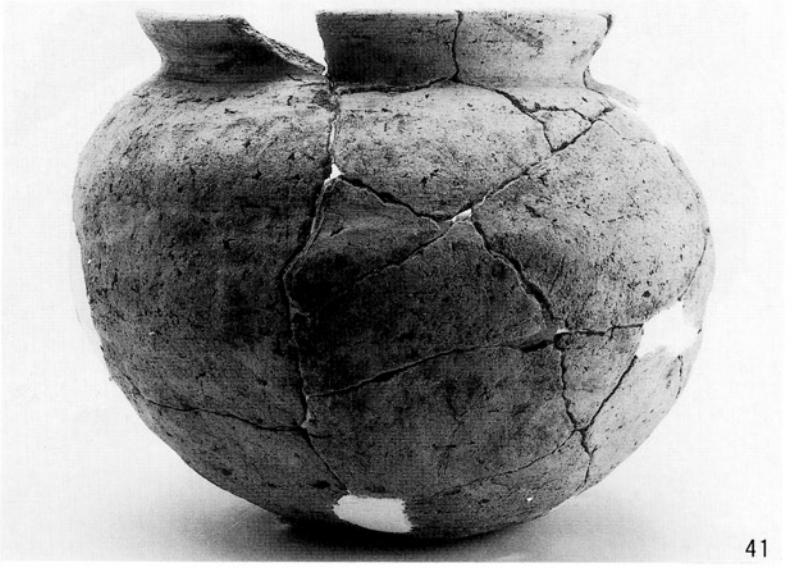
76


81

86

39

40

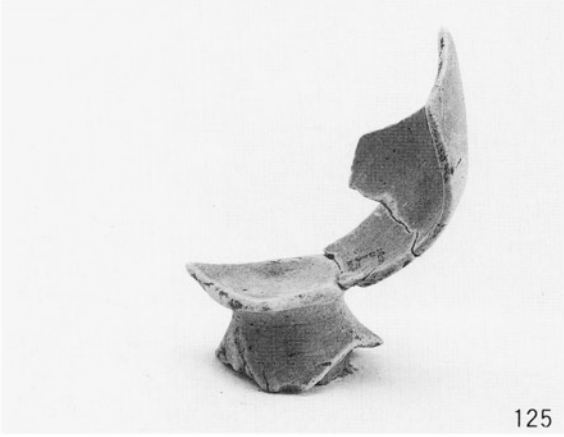

41

出土土器（1：3）

図版 8

118

141

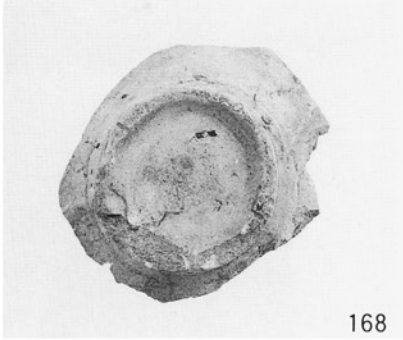

125

146

135

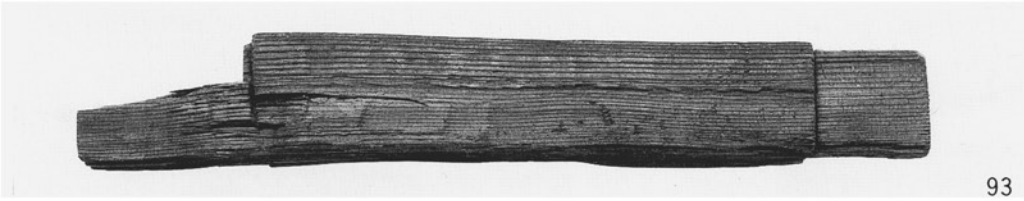
147

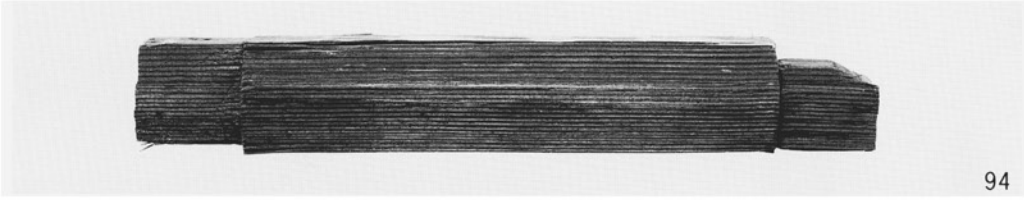
174


168

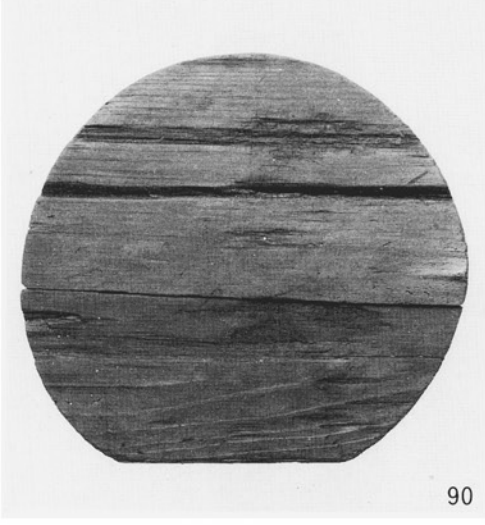
176

出土土器（1：3）

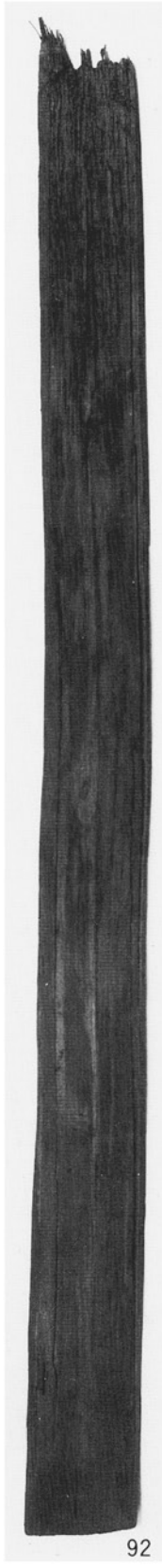

93


94

88


90

179


92

91

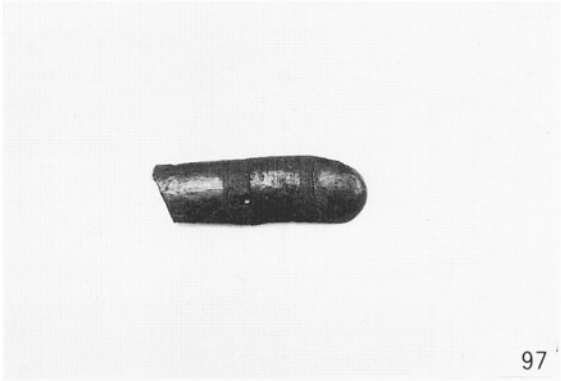
出土木製品（1：3、92は1：6）

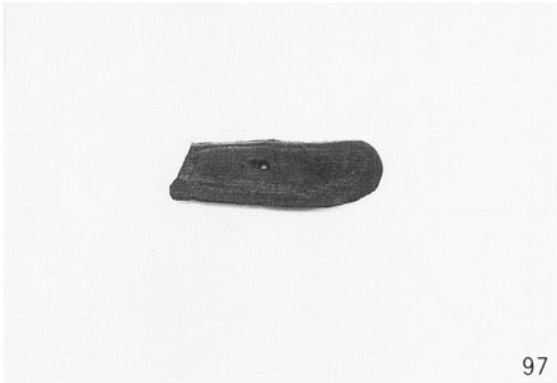
図版 10

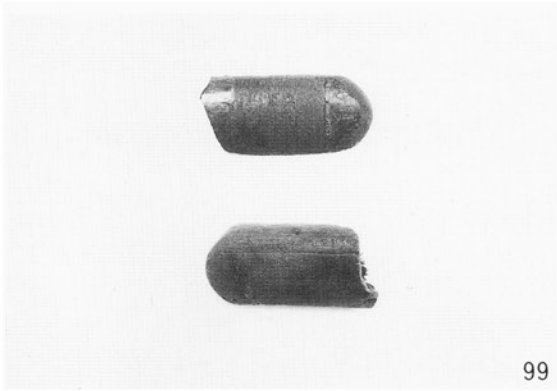
97

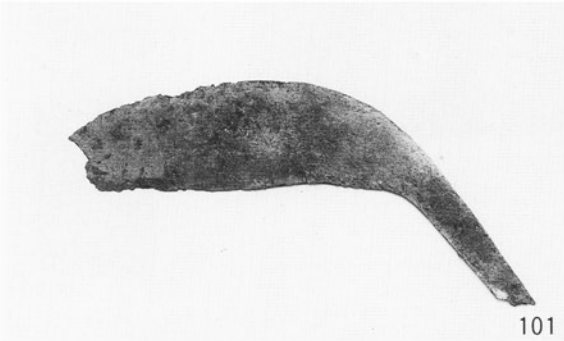
98

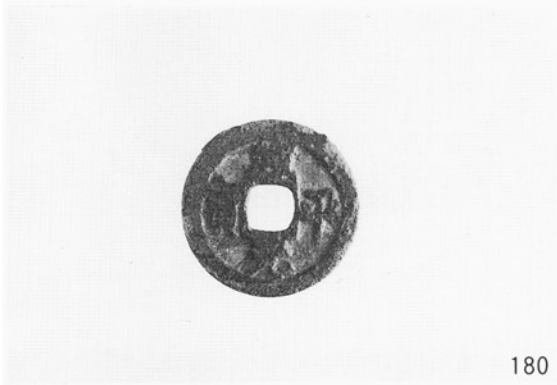
100


97


97


99


101


180

出土遺物（1：3、180 は原寸）

報告書抄録

ふりがな	かみの しょうきたで い せき はっくつちょう さ ほう こく
書名	上ノ庄北出遺跡発掘調査報告
副書名	三重県一志郡三雲町上ノ庄
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	177
編著者名	山本義浩・杉本寿範・北条正則
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503番地　TEL 0596（52）1732
発行年月日	1998年　10月　1日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
かみのしょうきたでいせき 上ノ庄北出遺跡	みえけんいちしぐん 三重県一志郡 みくもちょうかみのしょう 三雲町上ノ庄 あざきたで 字北出	244074		34 35 53	136 29 50	19970908 ～ 19971210	2,100	平成9年度主要地方道松阪久居線緊急地方道路整備事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上ノ庄北出遺跡	集落跡	弥生後期		壺・甕・高杯	
		古墳後期	土坑・溝	土師器・須恵器	
		中世	井戸・墓・溝	土師器・陶器・小刀	井戸枠（木製）
		時期不明	掘立柱建物		

平成 10(1998) 年 10 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 9 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　１７７

上ノ庄北出遺跡発掘調査報告

～三重県一志郡三雲町上ノ庄～

１９９８年１０月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター

印 刷 者　東 海 印 刷 株 式 会 社

上ノ庄北出遺跡
三重県